



71
489



始



71-489/1



田代金集

才十之三

大正
10. 6. 30
購求

浪六全集

第拾參編

浪六著

原田甲斐

老女の化粧とぞいふ師走の月たかく空に冴えて、ふけわたる夜の霜も大地に凍りつと、江戸百
萬の人家のみかは草木も睡る大川端に、おし寄する上汐の水嵩まして兩國の橋杭も沈みたる
かと疑はれんほつと薄墨の刷毛繪に似たる對岸の家々より、何者の夢をや誘ふ漏るゝ燈火ち
りほほと水を砕いて流るゝも物凄し、

をりしも駒止橋の彼方より、更け渡るこの寒天に布子一點寒曝しの男一人、たとひ衣手うすく

原田甲斐

とも酒さへあれば何のその、霜や氷は爛の湯と、やれ手拭の頬被りに鼻唄うたうて千鳥足、かくても歸る家や持ちけむ、やうやう百本杭の邊まで來かよる前途、御藏橋の方より、また一人の武士、黒頭巾まぶかに黒の卷羽織、大地の霜を踏む草履の音しとく、さりとして月に浮かると風情もなし、

互に近づきて行き違はむとする時、黒頭巾の武士おもはず足を止めて、月の光りに男の面を差覗きつよ、

「ちと物問ひたい、この邊に近藤といふ町儒者ある筈、おぬし知ッておじやらぬか」
四邊に人はなし、聲さへ霜に冴え渡る武士の姿、じろく見込みながら、なほ残る酒氣を吹いての高笑ひ、

「はよよよよ、これは近頃の勤番衆と見えるわ、この大川の流れに添うて打續く屋敷窓、

どこに町儒者なンドの住むべき小屋が」

いひつよ又もや鼻唄まじりに行き過ぎむとするを、黒頭巾の武士なほも呼び止めて、

「なるほど、きけば然であらう、とかく田舎者は不案内で困る、さらば今一事きよたい、おぬし元來どこに住まると、獨身か、親兄弟を持たれぬか」

「はて、不思議の事を聞く武士ぢや、それ知ッて何とする」

「いや、獨身か妻子持か、聞いた上で別段の頼み、まづ何にせい、草の由縁もない身が、夜明け人定まッて水音さへも眠る此川端に、かく行き合うて月を媒酌の一言二言、これも世にいふ他生の縁でがな、なう男衆」

「や、いよく、無氣味千萬、しかし親なし子なし女房なしの一本杉で、厩河岸の三太と聞いて何とする」

「はよよよと獨身者か、さて獨身の男なりや用はない」

いひつよ二三歩そのまゝ行き過ぎしが、おツと叫ぶ聲もろとも身を翻して躍ると見れば、月に閃く氷の亦に電光石火の勢ひ、あはれ男の身は兩斷になつて紫の血煙さつと立ちぬ、黒頭巾の武士しづかに立寄つて、片手に白刃の血汐うち振りながら月に透して兩斷になりし腰車の斬口、あゝ我ながら遣つたりけりと思ふが如き風情、

「彌陀佛、彌陀佛」

空てる月と岸うつ水の外は、神も知らしめすまじき眞夜中に、大地の霜を染め出す血汐の跡、つくづく見ながら兩斷になりし死骸の上に、やがて曉けなば人手にかよる世話料とや、懐中より紙包みの金子なけ出しつよ、彌陀佛と唱へて其まゝ行き過ぎむとする黒頭巾の武士、十間あまり歩み出す背後に聲あり、

「やれ御手のうち、ついでに御刀を拜見いたしたい」

や、曲物と靜に見返れば、おのれこそ曲物と靜に進み寄る、呼ばれし武士も黒頭巾、呼びし武士も黒頭巾、月のみ白く照り渡りぬ、

「お言葉なれど、敵手は下郎の不意打に御坐れば、手のうち御褒めにあづかつて赤面の至極、しかし一刀の義は聊か名物の端くれ、お所望とあらば御覽にも入れむが、誰様の前にもせい、抜いては其まゝ無事に納めぬ男で御坐れば」

何とやらむ足の踏場を廣げて用意の腰骨じつと据ゑぬ、

「さても御念の入つたることよ、それほどの義を辨へいで呼んだ者と思はるゝか、はよよよはよいざ一見いたさうわ」

いひつよすつと歩みぬけて眞正面に立塞がりぬ、

「四邊に人はなし、名乗り召されい」

「御邊さへなくば其まよ無言で歸るべき筈の者、さらば呼び止められた其許より名乗り召されい」

「お言葉、お言葉、これは奥州者が江戸の師走月に浮かれての夜ぶかし、さて主持なれば憚ツて名は申さぬ、氏は原田」

「や、奥州原田、もしや御本家の甲斐殿では御坐らぬか」

「さ言はると其許は」

「御一門兵部家に近來めされたる伊賀者、恐れながら菅野小介と申す瘦身で御坐る」

「さてこそ兵部殿の御内に今ほどの御手練あらむ人は、この甲斐が聲音でも知らるゝ筈、さて何がための御一刀ぞ」

「御人もあらうに宗家大夫の御目に止つて今更ら何とも、これは主人義、あらたに求めたる

古備前刀の斬味みよとの内意をうけて」

「なるほど、兵部殿は近來しきりに武術御執心の風聞、いや全くのことぞ、されどまづ今夜は何事も甲斐しらぬ體、御邊も其まよ」

いひつゝ空てる月を打仰いで悠々と立去る風情、流石は奥州伊達家に隼鷹と唄はれたる少年成長の後は二百六十餘大名より手を代へ品を替へて横取せむとまで争はれたる名物男、今この江戸屋敷の總支配として八千五百石の知行取、原田甲斐この人かと菅野小介そのまよ見送りしが、何おもひけむ俄に後姿を追うて腰を屈めながら、

「お供も召されいで御大身の深夜獨行、拙者め幸ひ御門前まで御見送りのため」
原田甲斐しづかに振り返りて片手に會釋しながら、

「いやく、これが身勝手、はよよよいま太平の世で御坐るわさ」
他家にては江戸家老、仙臺にては總支配ともいひ江戸奉行ともいふ、しかも九州原田の嫡々
正統として、伊達家に屬してよりは醫王野の戦鬪に鬼摺みの名を得たる名家の一子、幼名辨之
助、今は陪臣ながら將軍家にも聞えたる陸奥の甲斐といはるよほどの武士が、夜更け人定ま
つて供をも連れず唯一人、何の用ぞ如何なる仔細ぞ、
師走の月を身に浴びながら、中音に小謠うたうて、はや汐留の仙臺屋敷、武者窓つとく其裏
門まで來かよる折しも、

「大夫、大夫」

聲は正しく百本杭で物いひかはせし菅野小介と、甲斐しづかに見返りて、

「何の用事あらッしやる、深夜わざくこよまで追けられたは」

「いや別義は、たゞこれまで御見送りのため」

「やれ御苦勞千萬、いづれまた逢ひ申さう、かけても兵部殿に口外めさるな、原田甲斐が今夜
お刀の斬味みたりなんどと、あの御氣性に入らざる事を聞かし參らするも無用の業ぢや」

「はッ、御念の御言葉しかと承はりまする、ついでには小介義、御分家の新參者として御本家
の大夫へ公然の御意を得むこと何とやら、また上下の分も御坐れば、あはれ何卒もッて、お
もひがけない今夜の拜調を幸ひ、あらためて聊か申し上げた義が」

「ふむ、さらば附いて來られい」

裏門の横手より漏るよ番所の燈火さしのぞいて、しづかに打叩き、

「こりや開けい、甲斐ぢや」

かねて言ひ含めけむ、まだ寝もやらぬ足輕一人、はッと答へて内より小門を開けば、

「大儀ぢやなう、一人の客を連れ歸つたぞ」

おのが役宅の玄關を横ぎりて、庭口の折戸より手を打鳴しながら飛石傳ひに樹立奥深く、書齋めいたる小座敷の履脱石に、二三度かるく足踏み鳴せば、それと心得て内より兩戸を引開けぬ、

「そのまよで宜い、いざ此家へ」

振り返りて小介を呼入れながら、自己まづ設けの蓐に坐しつゝ頭巾を脱いだる面體、丸絹燈の光りに見れば、當年とつて三十二の男盛り、眼尻の釣上らむばかりに兩鬢の毛を引つめて、青黛を塗れるが如き髭髯の痕、色は淺黒く目は白く冴えて太く逆立つ眉、一文字の脣端、さのみ背は高からねど兩肩おのづから怒りて、凜たる面魂の中に何處やら浮世の愛敬を含みぬ、
「さ、うちとけて坐を進められい」

「はッ、はッ」

月すでに傾いて樹立しけれ庭の隅々、今更の闇に奥ふかき一室のうち、残んの燈火かきたてよ、主人の甲斐と兵部家の新參菅野小介、誰か知る差對うての物語に奥州五十四郡の存亡興廢を兆さむとは、

菅野小介、元來は伊賀の産、國柄の武邊者として名譽の据物斬、しかも忍術の家筋に生れたる男なりしが、さる仔細あつて藤堂家を立退き、この江戸に浪々の尾羽うち枯せし姿を、きよ及んで分家の伊達兵部に召抱へられ、日は淺けれど今は心も深く頼まれたる一人、窃に主の内意をうけて本家の棟梁役たる原田甲斐に近つかむと覘ふ平生の希望を、おもはず認められし今夜の試斬より附込んで斯も推參するほどの曲物、またそれを知らず此處までは引入れ

まじき主人の甲斐、何とやら互の言葉に總身の氣合を計りぬ、

原田甲斐わざと容貌を打解けて笑を含みながら、銀の長煙管に煙草くゆらしつと、

「異な事を聞き申すが、兵部殿、近來いかに日を送らるよな、しきりに浪人の武邊者を召抱へらるよよし、今夜の手のうち其許などは其中の剛でがなあらうわ、なう」

「お言葉にあづかつて汗顔の至極、主人こそ拙者風情を新たに召さるとは全くの御慈悲一片かたぐ子息の市正殿を仕立てむため」

「それは至極の御心掛ちや、いづれの歴々衆も今この太平に慣れて、歌舞音曲にのみ沈むの折柄、や、天晴の御氣分、さすがは四海に轟き給ひし政宗公の御末子ほどある、さても見上げ参らする御心懸、ついでには當本家の箔で御坐るわ、其許なども忠義第一武士冥利どこまでも御奉公大切に召されい、御分家の名譽は取も直さず宗家の名譽、なう然でないか」

「はッ、それに就いて主人義、かねぐ大夫の御人品を御賞美あそばされ、我々どもへ平生の訓戒にも、およそ武士たるものは萬事あれを見習へ、本家の甲斐が宜い手本ぢやと一本槍に仰せらるよほどの次第」

「はよよよ、それは兵部殿の御言葉あやまり、其許などの聞き誤りぢや、この甲斐づれが武士の手本なりや、日本三大名と唄はると伊達家に人はない道理」

「いや、全く以て主人義つねぐ」

「よしや御鑑定違ひに全く左様いはるとも、現在その人の面前では申さぬもの、心にもない諂護武士の名を流さうぞや、はよよよ可憎ら男に疵つくが笑止さ、かく無遠慮に、しかしこれが甲斐の本姓で御坐るわ」

鐵槌をもて頭上より打下すが如き一言に、さすがの小介はッと驚いて南無三寶、折角の今宵

を空にして退けたりと後悔の顔色、はやくも見て取る主人の甲斐さらに笑を含んで膝を進めながら、

「これを縁に懇ろ致さう、をりく来やれ、いはど朋輩ちやもの」
いひつゝ小介の眼中をジロく見込む風情、いとど物凄し、

古今の一人たる豊太閤の荒膽を取挫ぎ、今この太平の基として神君と稱するほどの家康に心を置かせつゝ、機会よくば四海を狭しと喚いて水や空なる萬里の外に飛び出さむとせし獨眼龍その伊達政宗が妾腹の一子、さらば忽ち諸侯の列にも加へらるべき筈ながら、あれほど武勇の大家に親類の多からむは天下のため危しとて公議より許されざりしかば、本家の内證高より、別に三萬石を引分けて、竊に一の關の城を持たされたる伊達兵部、仙臺の當主には一

人の大叔父たる威勢もろとも、さすがに英傑の遺子なりとて其子市正が嫁は、誰あらう下馬將軍と唄はれて飛ぶ鳥おとす時の大老職酒井雅樂頭が息女なりける、

されば日本三大名の一人を甥に持ち、獨眼龍の政宗が世に遺せし形見として崇はれ、時の大老が愛娘を子息の嫁に取りしほどの伊達兵部、身は本家よりの内證高わづかに三萬石ながら、今は表面の諸侯三四十萬石を見下して、結句むづかしの役儀もなき我まよの世上を振舞ひぬ、

新参ながら出頭の菅野小介、朝とく罷り出でて伺へば、兵部おもはず笑を含んで、

「昨日遣はした一刀の斬味、どうぢやツたな、ついでに語ッて聞かせい前夜の始末を」

「はッ、もとより拜領の品、拙者風情の細腕にも、殆ど鐵石ものかはの斬味」

「むよよく斬れたか」

「人身たとへば豆腐の如き心地で」

「して何者をしたな」

「ところは兩國の百本杭、妻子なき獨身の下郎、しかも肥え太つたる奴これ幸ひと一言一言も
の言ひかけて其まよ、腰車の番骨より眞兩割に、彌陀佛と唱へて立去らむといたせし背後
に、その御刀を拜見いたさうとの聲、しや曲物と振り返れば」

「むよ面白い、何者であつたぞ、如何いたした」

「御前、佛神かけて思ひもよらぬ御本家の原田甲斐殿」

「や、甲斐、あの甲斐が何として」

「著流し黒頭巾に供をも連れず唯一人、いづれ仔細あるべき事と心得、まづ一應の挨拶申し
て別れし後、かねて御含めの次第この時、またと得難き僥倖と存じ、みえがくれに御本家

の裏門まで」

「いよく面白い、して其後は」

「言葉たくみに附け入つて、甲斐殿と曉までの物語」

「むよよく仕つた、その節の彼が言葉に定めて予が事を申しつらう、何と心得居るな、はよ
はよよよよ兎も角も面白い、本家の江戸家老として深夜獨行の仔細こよが予に取つての宜
い握り柄ぢや」

獨眼龍と唄はれたる伊達政宗の子に生れ、下馬將軍と聞えたる天下の大老職酒井雅樂頭が愛
女を子息の嫁に取りながら、甥に當れる本家よりの内證高わづかに三萬石、いはど國司の馬
飼料にも等しき端知行に半白の今日までを送りぬること、おもへば無念心外の至極、さても

策術なきに似たりとは、兵部が胸裡に宿れる平生の一物、いつかは事なくして其まよに止むべき、

されど飽まで我腹心となつて知略をめぐらし、子息が股肱となつて將來を引受け、もし叶はずば一死の骨に武門の意地を立て抜くほどの男、誰かある、唯こゝに本家の奉行役たる原田甲斐、彼奴ならば筋目といひ人品といひ文武の業は固より今太平の世には天晴れ惜しき面魂におよそ天下を盗ましても盗みかねまじき奴、もし叶はぬ曉に奥州五十四郡を冥途の土産に引提け行くほどの事は、片目片手の活動にてもなるべき奴、さても彼の男ほしや、あはれあの男を手に入れたや、
されば兵部が甲斐に結ばむとて、日夜さまぐの工夫を凝らし四季をりぐの音物を贈り、その他の内外かけて恩を運ぶこと絶え間なけれど、甲斐は本家の總支配として身に餘暇なき

のみか、家門にかよる用談かつは式日の外に内證高の分家へ不時の出入せむこと何とやらむ、わざと自ら遠退いて打過ぎしが、はや今年も暮れて師走の末となりしかば、家例の式に依つて歳暮の御禮かたぐ、

御本家の甲斐殿まゐられしとの口上、聞くより主人の兵部は待ち兼ねし例年の式日、かねてより用意せし山海の珍味を一室に設けさせて、それくと茶坊主を長廊下の杉戸口まで、みづからは書院口まで立出でて迎へぬ、

刑部小紋の麻上下に鬘斗目の袷紗小袖、大刀は九州原田より家傳の波の名物しづかに出迎ひの坊主へあづけて、小刀は父より譲られて政宗の差副たりし午王善光これのみを帶して、其ころ奥女中にまでも甲斐ふりと唄はれたる結髪の一風、まして十二の時に山中の白狼を斬つて一藩の荒膽を振り十五の春に先君を諫めて舌を巻かしたる男の今は三十二歳、おもむろに

長廊下を渡り行きて書院口に主人の兵部が立姿、見るより忽ち其座を迂り下りぬ、

「はッ、これは何たる思召、御家來同然の甲斐めで御坐る」

内證高の分家ながらも正しく主筋なる伊達兵部、飛ぶ鳥おとす本家の江戸家老ながらも固より家來筋なる原田甲斐、されど兵部が胸に一物あつて殊更に慇懃の客待遇をすれば、せらるるほど甲斐また愈々身を下して言葉を慎みぬ、

「これはく、例年に依つての入來、いかう満足に存する、一人にて公私萬端の總支配、さぞ忙しい事でがな、今日は兵部が主人役に心ばかりの馳走いたさうわ、ゆるく語つておじやれ、あ、いつ見ても天晴れ男振、よくも肖たものぢや父の大内藏に其まよ、たしか當年三十二歳にならるよの」

「はッ、有難の仰せ、身に餘つて心苦しう存じまする、世に四十八館とも唄はるよほどの伊達家、されば他門にも増して老功の歴々多き中に若輩未熟の甲斐め一人、かく召出されて大切の江戸御用を取扱ひの義、これは唯、もしや萬々一御家に瑕瑾などあらむ時の御用意、一命すてと公儀の申譯に立つべきための犠牲、いはど諸家方の血祭坊主とも心得まして、おのれが分際を顧みず斯く」

いひつゝ額越に主人の殿を見上ぐれば、兵部おもはず笑を含んで片手を横に打振りながら、「いやく、それほどの辯舌、それほどの覺悟ある上は、家に瑕瑾の出來よう筈なく、また犠牲の用もない筈ぢや、この兵部などこそ、いたづらに本家の知行を喰ひ嚙つて無役無用の生涯、かく半白に立至るまで何の仕出來したる義もなく、世間へは隠居同然の身、公儀へは浪人と等しい蔭の身、いはど我こそ一朝こゝに事あらむ時の犠牲、はよよよよなまじし筋目ある樹の枝葉は却つて口惜しい事の多きものよ、せめて草を敷寝の下司ならば、

また自己が活動で世に出づる方もあれ、なう甲斐、このまゝ埋木に相果てなば先考尊靈も嘸や嘸、あはれ骨身もない奴、いやしくも我血をうけしほどの奴でもないと思召さうわ、なう甲斐」

「恐れながら其義は、聊か御料簡の違ひしかのやう心得まする、そもく御身は天下に誰あるべき、鬼神の太閤殿下にも凡人ならぬ神君にも、天晴れ心を置かせ給ひし政宗公の御末子なればこそ、なほ公儀にも内々に憚るところあつて、わざと公然の諸侯にもなし參らせざるは、これ全く御尊父様の御餘光、また御身に取つては此上もなき武門の冥加、恐れながら三萬石の内證高に陣屋めいたる一の關の小城に在しながら、これほど磐石の天下取に恐怖を抱かしむる我なりと思召さば、なか／＼以て大道に毛鎗ふりたつる國持大名なンドよりは、幾倍の御手柄」

「なるほど、天晴れ當世の辯者、さう聞かば先づそれにもせい、兵部こと元來の無事嫌ひ」
「それは、また格別の義、すは事あらむ時は御本家と御分家の差別は無用の穿鑿、御身は正しく伊達家一門の御年長様、よしや御辭退あそばさるゝとも、かく申す甲斐なンド第一番に馳せ參じて御馬の轡を取りまらせ」
「むゝ、左様の時を夢にも見たいな」
「はゝゝゝゝこれは詮もない御意、まづ左様の御夢を御覽あそばされぬやう偏に願ひ上げまする」

春とは名のみ一月の中旬、今朝よりの雨も霽まじりとなりて、いづれ今夜は雪にや變らむ空模様、流るゝ水さへ氷るかと思ふばかり、見渡せば川越に立すくみたる駒形堂の彼方より、

はや寢込みし船頭の枕頭に佐渡の小砂や降りかけよむ、たゞ一人つなぎし舟を漕がして渡り来る武士、裾長の雨著に柄袋かけたる大小、傘の手の小田原提灯に脚下を照らしながら、黒塗の高下駄に路を選んで歩み行く厩河岸の前途より、竹の子笠に赤合羽の下郎が脛を早めて、武士を遣り過しながら振り返って聲をかけぬ、

「大夫、この雨中いづれへの御運びぞ、大夫、大夫、甲斐様」

鷹の目に地獄耳と唄はるゝ男なれば、はや其聲に忽ち其人と知つたる甲斐、いつぞやは我より聲をかけ、今夜は彼奴より聲をかけられ、しかも月と雨との相違あれども同じ大川端の一筋途に、夜は更けたり狗の子一頭の乳を求めて鳴く聲さへもなき時も時かな、元來いぶかし奴、近來ふしぎの奴、新參の主持なほさら暇なき身の今頃、何用あつて何處へ行くか、しほれば色に出む、たよかば音にや吐かむと、しづかに歩を止めながら、

「さういふは兵部家の御内、過日ふと逢ひ申した人でがな」

「はッ、御意に御坐りまする菅野小介め」

「見れば一本おとしの赤合羽に急ぎの空脛、しかも深夜の雨中に殊更の下郎姿、じたい何用あつて何處へぞ」

「この前途の小梅と申す土地に、拙者め浪々の砌、深く誓ひし朋輩の病氣、危いとこの報知に」

「ふむン、それは天晴の友達甲斐ちや、殊勝の至極、されど態とめいたる下郎姿は」

「夜中と申し雨中の急足、結句これが身輕う心得まして」

「成程、ところで、この甲斐が過日といひ、また今夜の忍び姿、身の程も辨へいで何處へと問ひ返したき顔色、どりや見せい、はよよよよ」

大聲あけて笑ひながら提灯の火を差出せば、菅野小介はツと驚いて又もや腸を扶られたる心地、

「なかく以て、左様の義は」

「いやく然であらうわ、さうなうて叶はぬところ、さらば甲斐より打明けて語らう、實は近來あの駒形堂の傍に人しれぬ隠宅を構へて、をり／＼それへの通路ぢや、俺も我ながらの好奇千萬、はよよとついでに隠宅の様子見て置かれぬか、歸られて兵部殿への御一興にもなる事、あの甲斐奴が町住居の隠家で何をしをるか」と

二百六十餘大名、旗下八萬騎、その他に身を立て世を稼がむとて諸國諸州より入り込む浪人を加ふれば、およそ幾十萬とも數へ切れざる武士どもが、八百八町と聞えたる此の大江戸に日夜間斷なき往來の中を、上下の分こそあれ身の程こそ違へ同じ伊達家の我と彼奴、ところも變

らぬ同じ大川端の一筋途に、しかも夜更け人定まッて月に雨に一度ならず二度までも行き逢ふこと、さても訝し、もしや彼奴め兵部が内意をうけて平生より我影を追ひ纏うての業か、

伊賀者の本性、まして忍術の達者と聞くからは、猶更ら仔細ありけの奴、

小梅に住める古朋輩が急病と聞いて、この寒天に雨を衝きながら驚き馳するほどの者ならば、殊更に身を窺して下郎合羽に急がすとも、馬もあり駕もあるべき筈と、原田甲斐おもふ心に俄の一物、そのまよ行き過ぎむとする菅野小介を呼び止めて、

「や、待たれい、ちと其所に聞きたい事もある、小梅の朋輩衆が病氣とやら、さのみの重症でなくば引返して甲斐が隠宅まで立寄ッてくれまいか、今もいふ通り、あの川向ふの駒形堂より右へ一軒二軒三軒目の路地口、その奥の二階家ぢや、原田といはず甲斐とも申さぬ、たゞ原とばかりの一字名で知れるぢや、幸ひの雨中、これより我も引返して待たうわ」

「はッ、過日といひ重ねての御懇意、さらば憚りながら後刻に」

「むよ必らずおじやれ、酒温めて夜と共に語らうわ、このまよの雨にてもよし、また雪となれば 曉の眺望、息つまりし武者窓の長屋とは違うて殊に一入ぢや」

菅野小介、こよに大願成就の緒、してやったりと思ふ心も顔色も赤合羽に包みしまよ、降り来る雨に脛を飛ばして馳せ出せしが、小梅の朋輩とは固よりの根なし草、みれば吾妻橋の袂に葭簀張の爛酒屋これを我身の佛神と拜み込み、かねて巧みし大事の前ながら此寒天といひ本来二升酒の腸に三四合の小盃、息にも色にも悟らるゝ筈なしと、殊更に二時ばかりの暇を潰せし後、やうく橋を渡りて駒形堂より三軒目の路地口、なるほど、みれば奥の正面に粹を凝らせし町屋づくりの二階建、しかも人しれぬ家守の本尊いづれ男にてはあるまじ、されど思へば、浪人しても世に聞えたる九州原田の嫡々、ましてこの大江戸に肩いからして奥州

五十四郡の公私萬端を身一つに取捌くほどの武士が、月に浮かるゝ時節でもあることか、雪にやならむ雲まじりの寒天に雨を衝いて、たゞ一人の奴さへ召連れず忍んで通ふ此かくれ家へ、心おくべき分家の新参たる我を招いて何事をか問はむとする、音に聞ゆる智者の甲斐が手前、なんとやらむ今更に氣怏れして、不敵の小介おもはず路地口に立すくみぬ、そのまよ暫し路地口に佇みしが、よしや家内に劍の林を植ゑて人間の生膽とるとも恐ると男にあらず、まして此家の主人が美女でもあれば萬事さらりと解けて讀み易き業と、こよに性根を据ゑて訪へば、家内より燈火さけて立出づるは六十の坂を越えたる白髮翁、

「先刻、途中にて御意を得し小介と申すもの、原様御坐らうなれば」

「や、お待かねの客人、いざ此方へ」

がら、爺ぢやうに引ひかれて上のぼり行く二階にの梯子はしご際に、腰こしの一刀たうさしおいて襖ふすましづかに押おし開ひらけば、原はら田た甲か斐ひをりしも唐たう机ぎに片かた肱ひでらかけて物ものの本ほんを見みたりしが、やをら振ふり返かへりて

「よく來こられた、小梅こづめの朋輩ほうはい衆しゆうとやら、病氣びやうきいかどであつた」

「はッ、有難ありがたの仰おほせ、何が儲さそ、長々ながくと尾羽おへうち枯からせし素浪人すらうじんの急病きふびやう、たのむ木下このもは勿論もちろん、

草くさの葉蔭はかげもない奴やつで御坐ござれば、持參ちさんの用意金よういぎんいさよか呉くれて、萬事ばんじを合壁がつへきの者ものどもへ依頼いらい

つかまつり」

「むよそれは殊勝しゆしやうの事こと、持もつべきものは友達ともだちぢや、して氣遣きづかひなしか」

「一命いちめいには別條べつてうも」

「いふまでもなく、なほ念入ねんいりに世話せわしてやられい、世よに落おちてこそ人の心こころの奥おくも知しらるゝぢや、時ときに甲斐かひが此このかくれ家が、何なんと見みらるゝな、おもふまよの鑑定かんとうしやれ、家守やもりは六十むその坂さか

を上のぼつた老爺おぢ一人ひとり、これも譜代ふだいの家來筋けらいすぢでない、近來きんらいめしかよへた町生育まちそだちの通常たうじょうの老爺おぢ、

その外ほかには走使はしりつかひに十六じゅうろくの小童こわらと、拾ひろひ上げた迷まよひ猫ねこ一頭ひとびき、はよよとよとよ」

「何なんとも以もつて拙者わたくし風情ふうせいには、されど、一通ひとり相伺あひうかへば、日夜にちや御多用ごたようの人ひとしれぬ御休息所ごきゆうせきじよかと心得こころえまする」

「身不肖みふせうながら伊達家だてがけの内外ないがいを一人ひとりで捌さばく甲斐かひに、公然おもてむかの休息所きゆうせきじよはあれ人ひとしれぬ隠家かくがの休息所きゆうせきじよは無用むじようの沙汰さたぢや、よしまた疲勞つかれを慰なぐさめるためならば、遠路まんろわさく、夜中やちゆうの雨あめをついても來こぬのぢや、はよよとよとよ」

「はッ、されば恐れおそながら伺うかひまする、そも此家このやは何なんのための御おんまうけ」

「これは、汝なんぢが主しゆうの伊達兵部だてひやうぶが生首なまきびを見みむための寮れうぢや」

「やッ」

原田甲斐

「小介近う寄れ、原田甲斐あらためて尋ねる仔細、もし一點の欺偽でもあらば弓矢八幡、その座を去らせぬぞ」

「はッ、はッ」

「寄れ、近う寄れ」

「歴々の諸侯方さへ、叨りに由緒なき浪人を召抱へむこと、いづれも公儀へ憚つて遠慮勝なる中に、内證高より僅に三萬石の分家たる無役の身が、本家への届けもなく、月に三人五人、多きは十人の餘も草葉の素浪人を引上ぐる兵部殿の心中、そもく何のためぞ、元來おのれは眞先に抱へられたる奴、しかも近來しきりの出頭とて内外の相談役ときく、また浪人召抱への鑑定役ときく、さらば兵部殿が人しれぬ用意の仔細しらぬ筈なし、かつは此ごろ何とやらむ此甲斐が影を追うての働きぶり、いかにも不審ぢや、そこ動かすに白

「状せい」

隙もあらせず責め問ふ原田が面魂、もしや返答に此上の不審あらば電光石火、忽ち一刀の鞘を走らせかねぬ猛勢に、さすがの菅野小介も南無三寶、逆さまに深い處へ引込まれたる後悔なんと今更に詮なければ、こよに伊賀者の本性、事の最後は生命一つで済む理と、腸おしするて兩の膝頭ぐいと進めぬ、

「甲斐様、まづ御言葉よりも御刀の鞘を拂つて斯くいふ小介の眞向額口へ御當て下され、その白刃の下で確と一言申し上げたい義が」

「はよとよとよその一言を天晴れ男と思うて吐したか、よく聞けい、たとひ据物斬の達者にせい忍術の本手者にせい、おのれ等風情一人に抜刀の穿鑿は入らぬ事ぢや、そのまよ其處にて申せ」

原田 甲斐

「や、膽かな、膽かな、その御胸の廣さに却つて遁路を失ひ、神かけて八幡いつはらぬ小介が野心、實は拙者め兼て浪々の砌、このまゝ草を敷寝の夢に果てむも男甲斐なし、いかで世に思ひ出の一活動を、生は同じからねど死を俱にせむと誓ひしもの七十三人、幸ひ拙者め第一に抱へられたるを緒に、残る者共これを悉く兵部様に取持つたる上、小介が一味を以て先づ分家の三萬石を奪ひ、其後あらためて本家の五十四郡を頂戴いたさむの大望、ついで伊達家に一二の由緒あつて加之も頭領と仰ぐべき人、恐れながら甲斐様御一人と見込みて、萬事を兵部様の内意めいたる如く」

「はよよよとあくまで虚偽を申す奴ぢや、されど仔細あつて當分その虚偽を、そのまゝ眞實として聞かうわ、萬事あらためて兵部殿に面會の上、まづ今夜は其處を立てい」

もし我黨とならばをうて謀主とし仰いで事の頭領ともせむ、もし我黨たらずんば殺して骨にせむとは、かねてより甲斐を恨ふ小介が一物、

されば人しれぬ甲斐が隠宅を知りしだけにても幾何の力草、まして呼入れられて膝突き合したるは身を取つて球玉を抱きし心地、いさ此上は我舌と我膽の活動にありと思ひの外、無念や逆捻に腸しほられて散々に嘲弄せられ、しかも其時の彼奴が面魂、いづれ無事には置かぬ意氣込ありくと見え透きながら、わざと我を許して放ちしこそ却つて我もろとも更に大魚を一網にかけむの企望、おもへば草の葉蔭より拾ひ上げられて斯まで深く頼まれ参らせし主の身の上あやふし、おのれ小介が生涯一度の稼ぎ場ことなめりと、甲斐が隠宅を追はれて立出でし頃は、まだ夜は深く曉までには時刻もありなむ、あれほど催せし雪にもならず雲さへ止んで雨雲の断目より星の光り、ほつと臙氣ながら二つ三つ、

おもひ立ちては瞬間の猶豫もなき男、あはれ今夜を過しては萬事の南無三寶と、極寒の池中に身を沈めて小波も打たせず水鳥の寢息を攔むは忍術の極意、固より得たる業なれば更に何の苦もなく、其まゝ衣服を脱いで丸裸となりつゝ、満身の力に空を仰いで五體の熱氣を呼びながら、大兼光の一刀を肌に着けて甲斐が隠宅の塀際より横合の河岸に出で、岸に沿ひ杭に亂れて音なす急流へ、すつと身を沈むれば忽ち十間あまりを流るゝ如く、裏手の棧橋へ取付きぬ、

十二の秋に五十町の闇路を縫ひつゝ七つの獄門首に印をつけて立歸つたる奴、十三の小腕に深山の白狼を斬つて人にも言はざりし奴、今こゝに三十三の大男、互に名乗つて打合はゞ逆も叶はずとも、伊賀流の本手に摺り寄つて規はゞ袋の鼠、よしや夢おどろいて起たむとするも枕がへしの据物斬は此方の業、恐るゝに足らずと棧橋の木戸を越えて川沿の庭に立入り、廂

に両手をかけての宙乗に屋根を傳うて廚の天窓、かゝる事には大道を歩むに似たる小介、隙間に小柄さし入れて窓の紐を切り放ちつゝ、片手に掴みし苧繩しばつて其まゝするゝと身を落しぬ、

名は小介なれども骨たくましく膽は飽くまで太き男、丸裸のまゝ甲斐が隠宅の天窓より苧繩を傳うて廚の片隅に身を忍ばせつゝ、息を殺して窺へば隙間もる行燈の餘光ほつとして、前宵の取次に出でたる老父が躰の聲のみ高く、をりゝ天井に荒るゝ鼠の外は、人間といふもの我たゞ一人、

城廓の繩張、陣屋の内外は師傳の極意として、大名屋敷の八種、旗下屋敷の十一種を印可とし、寺院の結構、堂社の委曲、さては町人の大家より小屋掛の厠に至るまで、およそ人の住むべきところは多年の修業と日夜の工夫に依つて手に取るが如きは忍術の道の第一、されば

堀外に立ッて薨の波を數ふれば忽ち建坪を知り、鬼瓦の方角を見れば室取の大小を考へ、廂と窓の前後左右に殆ど人數までを知るほどの小介、まして前宵に招かれて廣くもあらぬ町家造作の隱宅、宛ら住み馴れし我家を歩むが如く、大兼光の一刀すらりと抜き持ッて、足音しのばせつゝ甲斐が臥房、こゝぞと覗ひ寄ッて襖の外に身を潛めぬ、

たとひ鬼神でもあれ悪魔でもあれ、伊賀流の本手を得たる我こゝに摺り寄ッて、枕がへしの据物斬に夢を斷たむこと何の苦もなし、ましてや同じ人間の死せるが如き寢首を搔かむは大力の濡紙を破るに等しと、へだての闕に厨より含みし水を吐き流して、襖しづかに引き開くれば、屏風の影に丸絹燈の光りさへ睡りぬ、

怨恨もなく仇でもなく、しかも斯人ほどの天晴れ武士一人、むざ／＼と寢首にせむことは男冥利、勿體なけれど大事に代へられじ、彌陀佛々々と這ふが如く摺り寄ッて屏風の端に片手をかくるや否、やツと叫びの聲さへ出さぬ不敵者、おもむろに大兼光の鋒を差向けて窺へば、南無三寶、夜具のみあツて主は藻脱の殻、

流石の小介はツと驚いて燈火ふツけし、翻るが如く飛び退けども身は輕し音もなし、室の片隅に潛んで闇を覗ひつ、一刀取伸べて屏風を仆せども人の驚く氣配なく、たと枕頭にありし小火鉢の灰神樂のみ立つの匂ひありける、

たとひ大地を打つ槌は外るとも、小介が忍び寄ッて搔き取る大兼光の鋒尖に、鬼でもあれ魔でもあれ凡そ何者か脱るべしと思ひの外、かくまで我手に入りし甲斐が藻拔の殻となツて夜具のみ残る不思議さに、さては悟られたり、あれほどの男に覺られたる上は危しく、我こそ却ッて危し、うかく時刻をうつして曉けなば寂滅、無念ながらも今夜は此まゝ家に歸ッて事むづかしからば腹搔き切ッて失せむのみと、下座敷の廊下に這ひ出でて片脚あぐるや否、

二三度どつと兩戸を蹴つて音たてながら、すつと身を退いて壁に添ひつゝ厨の方に忍び出づれば、今の物音に驚いて家守の老爺が寢惚眼に立ち行くを見濟し、もとの苧繩を傳うて天窗より屋根に脱け出で、庭に飛び下り木戸を越えて裏手の棧橋に遁れ出でぬ、まづ生命は無事なり、さるにても甲斐奴おそろしき奴かな、寢首かよむと摺り寄る我に空を打たせながら、闇より不意に起つて戦はむともせず、急所に追ひ詰めて生捕らむともせず、かくも悠々と放ちたる彼奴が心中、はて何とやら、死毒を舐めての後に三文の賣藥を含みしが如く、おもへばいとど氣味わるし、されど萬事は夜あけて後、今こゝに人や見むと棧橋より身を落し、横手の河岸に泳ぎつき、岸に上つて大息ほつと吐きながら、何心なく堀際に隠せし著類を取らむとすれば、半は手にありながら半は固く大地に吸ひ付けるが如し、はて訝しと力を極めて曳けば、根を透したる

堀の内より半を掴んで、

「小介、小介、せめての形見ぢや、この衣類を差置けいし」

さすがの不敵者はつと驚いて思はず手を弛めば、そのまゝするくくと曳き入れて笑ふ聲は懺に甲斐なり、しかも颯と中音の小謠かすかに、歩み行く庭下駄の音からころと聞えぬ、

奥まりたる小書院に、四邊の人を拂うて、主従たゞ二人、膝つき合はさむばかりに餘念なし、

草の敷寝の浪々より拾ひ上げられて今の恩寵を思へば、おのれを知るものゝために死すべき本文、一死さらに鴻毛よりも軽き身に斯くまでの大事を荷ひつゝ、かの甲斐が性根を掴んで持ち歸らむとせしを、思ひきや逆様に乘せられ落されて散々の體となりし菅野小介、流石は

男さららに包ます打明して、額越に兵部の顔色を窺へば、しづかに首肯いて、それほどの奴なればこそ甲斐ぢや、我手に欲しい逸物ぢや、

小介なほも膝を進めて聲を潜めながら、

「委細申し上げます次第、いづれ此まゝ無事に済むべき筈なく、甲斐あらためて参上つかまつり、何とか御前へ對して」

「むといづれ何とか、来て仔細を申すであらうわ、なれど元來、心は千尋の海の底しれぬほどの奴、仰々しく俄に騒いだ振舞も致すまい、つまりは人しれず予が手を取って諫むるか怒るかの二つ、はよよよとどちらにせい、例年式日の外は絶えて参らぬ甲斐が、私辨の料簡を以て予が膝元への往來、予に取っては却つて至極の方便ぢや」

「はッ、御大量の程おそれながら、甲斐が申條、もしや萬々一むづかしからむ時には、予は

知らぬ萬事は小介めが業、じたい彼奴このごろ新参の身も願みす叨りに予が名を使ひ居るとの風聞、さては全くの奸賊と御憤り遊ばさるべく、されば拙者一人の生命、よしや獄門首に相成りますればとて」

「むよその志は満足、なれど汝が一命まだく犬死させる時でない、しかも相手が太腹の甲斐ぢや、何とか無事に済むであらうわ」

「なるほど、かねてより御鑑定に違はぬ甲斐、決して魚忽の義はあるまいながら、さて油断のならぬ人、事なくば睡れる猫の如く事あらば吼ゆる獅子に似たりと他藩衆までに噂せらるよほどの甲斐で御坐れば」

「よし／＼その邊も心得た、時に小介、甲斐がこの江戸の總支配を致してより最早や五年にもならうが、いまだ國元より妻も呼び迎へず、また手許に心なくさむほどの女氣もないとの

事、こよは一工夫してみる隙間ぢやぞ、甲斐とて木石ならねば、なう小介、逆も眞向の太刀打では參らぬ奴」

「はッ仰せまでもなく其邊の義かねてより差心得、幸ひ前夜の隠宅、もしやそれかと存じの外、たゞ老老の家守一人」

「はよよよと汝ほどでもない、よく思うて見い、人しれぬ町家の隠宅へ、甲斐が目よりは不審の汝を、わざく呼び入れたのぢやもの、なんとして目のつくところに女氣を差置くものか」

「いや、恐れながら伊賀流の一手と致して、たとひ床下に穴を穿ち天井裏の片隅に押隠さうとも、平生に女氣のあるべきか無きかは家内を一見して忽ち」

秩父おろしの風ふきやめば、はや江戸の春景色、によつきり脚下に湧き出でて、空に颯々雲霞より薄絹きたる富士額を仰ぎながら、既といへど舟もて渡り行く川中に、むかし男が詠みたりし都鳥こよでは浮寝の鳥の二つ三つ棹にせかれて流るゝ風情を、下郎めしつれたる一人の武士、めづらしとや編笠越に見遣りつと、やがて扇子に對岸の水樓を指さして、あれかと問へば、下郎はツと答へて舟底に額を指り付けぬ、

舟やうく對岸の棧橋に著けば、腰巾著より鳥目を掴み出して抛けたるまよ、下郎まづ岸に上りて中腰に迎ふる體、編笠の武士さのみ老いたる姿ならねど、持てる杖を曳かれながら、しづかに舟を乗り捨つる風情、さすが生れてより朝夕江戸百萬の男女に馴れたる船頭ふしぎに送り見て、必定たどの二本さしにはあるまじとの顔色、

岸に沿うて駒形堂の片邊り、例の甲斐が隠宅の路地口に編笠たよすめば、下郎まづ奥に入り

て暫しの後、やがて取つて返して脚下に跪きつゝ何事をか申し上ぐる體、編笠しづかに首肯くが如く、主従もろとも其まゝ路地の奥へ入りぬ、

奥に入れば町家づくりの格子戸、小庭の飛石つたひに俗中の雅を帯びて、窓の此方の柴折門より竹の根越に裏河岸の水を見る趣味、何とやらむ壁一重に浮世を隔てゝ閑寂なり、かねてより此家の主人とは他年なき別戀の間柄、方角へ用事の途次もあらば立寄りくれよとは度々の言葉ながら、さる閑暇もなうて打過ぎし今日しも淺草へ參詣の歸るさに俄の腹痛、幸ひ一室を借りて暫時の休息たのみ入ると、下郎に物いはせて編笠ぬいだるは伊達兵部、其まよすつと打通りし風情を見れば、半白の年輩に衣服は固より腰印籠の華奢といひ黄金づくりの大小といひ、世上なみくの人品ならねば家守の老爺さらに疑念なく、いとど慇懃に扱うて、二階の一室へ誘ひぬ、

伊達兵部、仕濟ましたりと片頬に笑を含みながら、茶菓を運び來る家守の老爺を呼び止めて言葉やさしう、

「はて氣の故でがな、この大川の流水に沿うて斯く見晴しのよい景色が何よりの療治、どうやら腹痛も薄らいだ心地ぢや、片つまりの武家屋敷とは違うて町屋造作の洒落また格別、いや此まよで宜い、構やるな、構やるな」

「はッ、主人こと生憎、たゞ召使の老爺一人にて何の御待遇も」

「いやく、別段の待遇せられては却つて迷惑ぢや、時に主人殿をりくゝ來らるゝかな」

「まづ一月のうちに多くて五度か六度、とんと參られぬ月も」

「ふよむ、して元來この家は何時ごろから持たれたな、いづれ人しれぬ休息所であらうが、それにしては家内の粧飾も薄く召使ひの者も尠い様子、さて萬事に不自由でがな、主人殿

宿泊の夜は何をせらるよな」

「これは元來、さる町人の大家が隠宅に構へたるを、一年前に譲り受けられたまよに、拙老めが其ころよりの家守、また主人こと、をりくまるられての娛樂は、たゞ書見と裏の棧橋で魚釣の外は」

「なるほど、全くの骨休めぢやの、して時には客來も」

「いや御客は今日が始めて」

「一年以來この腹痛者が始めての客來とは、ふむ、して食物などは如何いたすの」

「それは近所の料理渡世より其度毎に」

「はて氣散じの至極ぢや、ところで女氣は」

「たえて御坐りませぬ、主人こと不思議に女は大の禁物」

「はてな、妻子を國元に差置いて、數年來この江戸住居に、かよる隠宅を設けながら手許の女氣一人も無いとは、はよよよこりや汝が無用の遠慮でがな、じたい此家の主人殿とは親類同様の我等、そと洩らしてくりやれ、一番おどろかして慰む下心ぢや、はよよよ聞きたいの」

「いや誓文かけて其義は」

「ふむ全く無いが定かな、それでは料紙と硯を借用したい、一筆おもしろき事を主人殿に残して置かうわ、今日の禮かたぐ」

家守の老爺を口車に乗せて曳き出せども、さらに規ひし見えねば、空鐵砲うちし心地して、主従もろとも立出でむとする路地の口より、年のころ十八九の町風につくりたる女、浮世の華奢を嫌うてや、さのみ風姿は飾らねど描ける如き眉目の美はしさ、はツと驚きたる體

に思はず差俯きし眞白の襟首へ水際たちて黒髪のかよりし風情、これぞ古今に怖るゝ男殺しの本性、今更ら俄に引返しも得せず路地の中途の片板に身を寄せ歩を止めて主従二人を遣り過さむとする氣配、紅粉の厚化粧に埋もれて螺線機關に似たる武家女中のみの兵部が目には宛ら天上の裸體美人に逢うたる心地して、編笠越に唯じろりく、

この路地の奥には甲斐が隠宅ならで何者が住むべき家やある、袋の口に似たる一筋の出入に今あの美女が顔を赤めて人に見られしを恥づる體、や、遁すまいぞく、

兵部そのまゝ路地を出づるや否や、扇子もて下郎が肩口を丁と打てば、はッくと心得て中腰に伺ふを編笠の中より何事か二つ三つ、私語いて立去る後に下郎一人ぐツと呑込み顔、忽ち取ッて返して甲斐が隠宅の近處に彷徨ふこそ此奴さて俄の曲者、四邊きよろく見廻しぬ、

甲斐が隠宅ならでは外に家なき路地の此奥へ、人に見られて顔うち赤めつと恥ぢらふ美人そ

も何として通ふべき、元來かくなうては叶はぬ管の隠家、あはれ流石の彼奴も今は凡夫なりけり、彼奴を責め落すには百萬の味方を得たるよりも心強し、ひけば人しれぬ色香や出でむ、たよかば浮世の外の面白き事や現はれむと、下郎を残して其まゝ立去りし伊達兵部、おもはず心に笑を含みぬ、

萬事さし心得たる下郎、御馬の前の功名は聊か我等に重荷なれども、かよる筋には金輪際の奈落の底までも探らで置かぬ男、年ごろ飼はれし忠義はこゝぞといはぬばかりの眼を光らして、路地口の彼方此方に待ち受けつと、あの美人の出で来るを今かくと覗へども、其後さらに姿見せねば猶更ら以て不審の女、昨日今日の出入ならぬと知るからは、いよく本敵ござんなれ、よしや消えて無くなる魔性の業ありとも、

はや其日も西に傾かむとするころ、やうく路地を歩み來る優しの音、すはこそと下郎その

まよ立去つて積み重ねたる材木河岸の物影に身を潜むれば、それとも知らずで何心なく出で來る例の美人、蔓々の隙間も夕陽に一入その色を照り増して、夕暮の足元なほさら眞白に運ぶ風情、畜生め、今この大役なくば我も生命にかけて無事は通すまじき女と、下郎そのまよ影を追うて、あれほどの美女が夜半の夢みる穴、さては箸とりあけて飯を喰ふ口元目元、何處ごと慕ひ行きぬ、

こよよりは遠くもあらぬ淺草の田原町、その横の小路に廂かけたる板屋の格子戸、しづかに押し開けて内に入りし後姿、下郎みるより膝を打つて其まよ近所の葭蕪張に飛び込み、まづ見届役の一義は濟んで必ず褒美の前祝ひ、やがて身元穿鑿さらりと探りし上は、たしかに一年分の給金増と、はや下司の本性こよに茶碗酒を重ねぬ、
ほりぬき井戸の底なし上戸ながら、慾が意見の役目に氣を持ちつよ、やうくほる酔ひの脚

下いまだ慥なるころ、燈火に驚かされて時刻も腹も上々吉、いざや本手に取かよらうわと、立出でて今しも見届け置いたる板屋の格子戸、がらりと開けて、

「たのみます」

かゝる事には口も軽く身も軽く、遣り損うてからが酒の上、くさい欠伸を一つ吹ツ掛けて飛び出せば濟む筈と、下郎ぬつと内に入りつと見れば、今の美人が燈火の下に唯一人もの思ふ體、しめたと腰を屈めて俄の慇懃に俄の空笑ひ、そのまよ其處に腰うちかけぬ、

「ちと物問ひますが、お見うけ申せば先刻、あの駒形の片邊り路地の奥の原様が隱宅へ何か御用のあつて參られた様子、その御用は別段として、じたいあの原様は、いづれの御藩か、それを伺ひたいために斯く」

いひつと額越に美人の氣配じろく、いかに答ふるやらむと待ち受けぬ、

たどさへ顔も得知らぬ男が不意に訪ひ来て、馴れくしげに物をいひかくる氣味悪さ、ましてや今しも母は裏口より何處へやら出で行きて、こよに身一つの夜を守りつよ、あの路地の奥と聞かると辛さは胸の釘、はつと驚いて顔うち赤めながら、

「思ひも寄らぬ御尋ね、あの路地の奥に御坐る方が、原様といふやら何といふやら、つい知らずに門違ひして」

「なるほど、路に迷うて門違ひせられたと聞いては其上、もはや物問ふ事もならぬ筈ながら、さて門違ひにしては時刻の時間取、はよよよあまり長いかのやうに思ひまするぢや、まして年若い女中の一人身で、あぶないく、御用心めされたが宜いぞや」

ぐつと急所を押されて俄に美人が當惑の顔色、畜生め、こよが千兩に鰹一文も引けぬところと、下郎ますます附け入つての笑ひ聲、

「これさ女中、決して怪しいものではない、實は四五日以前、兩國の橋で互に酒の上の大喧嘩、敵手が多勢で此方が一人、この撥鬚首が飛ぶかと思つた最中へ、一人の武家が参られたの仲裁、やれ嬉しや生命の大恩人、せめて御名前と伺つたれど、歴々の御身分あつてか、わざと其まゝに行かると後姿を拜みながら追けたは、あの路地ぢや、幸ひ今日は主用で淺草までの歸るさ、立寄つて一禮と思つた折しも和女が」

「それはくお心がけのよい事、なれども、喧嘩の時に御名前も知らぬ筈で、原様とは」
「その御名前も今日が始めて、あの近處のものに」

「それにしてからが、先刻、立派な編笠の御武家に附いて御坐つた奴衆と、ふしぎに、ようぞ似て居らるゝこと」

流石の下郎はツと驚いて南無三寶、

ものゝ用にと取紛れて二十日あまりも閉ぢ籠りつゝ、たえて外に出せざりし原田甲斐が、ふら／＼と汐留の屋敷を忍び出でて例の心易さに供をも連れず、衣裳さへ平生のまゝの藺笠まぶかに重ね草履の脚下かるく、たゞ人目に重く輝くは兩刀の小道具と腰印籠の高蒔繪、隠すとすれど何處やらに悠々として浮世の枷に責められぬ體、さりとして原田流と唄はると面魂も見えねば年輩も定かならず、影に従ふ下郎さへなければ然のみの大身とも見えす、いはゞ有徳の浪人が江戸めづらしさの見物めいたり、

大道一筋に駕も馬も自由の身ながら、わざと例の永代橋を渡りて兩國を左手に歩みつゝ、既河岸より渡舟を呼んで駒形の隱宅、

「老爺居るか、また来たぞや」

そのまゝ二階の一室に打通りつゝ、川沿の障子を開けて欄干の下に座を敷かせながら、片腕もたせて夕暮の景色さて心まで新なるの思ひ、身も軽う氣も晴れて手づからの煎茶三昧、やがて燈火の夜に入れば、取寄せたる町料理に獨酌の微酔を帯びて、天下の快事は人しれぬ四疊半、人間の娛樂は浮世の外此處なりけりと、おのが膝拍子に中音の小謠、これが日本三大名の其一を片手に扱ふ男と思へば、いとど優なり、

をりしも家守の老爺しづかに迂り入りて、恭しげに差出す一封の書狀、

「これは過日、奴衆を召連れて立派の御武家が、淺草參詣の歸るさに俄の腹痛とて、勿論、かねてより御別懇の間柄とやら、しばし御休息の後、拙者めに託された一書」

いひつゝ差出せば、甲斐おもはず眉を擧めて抜き見ながら、さらに驚ける體もなく怪しむ風

情もなく、

「や珍客々々、生憎不在で心外ぢや、年輩は五十三四の細面、瘦形の人品よろしき人であらう」

「御意の通りの御人柄、さてまた、いろくとの御尋ねも御坐りましたれど、念のため、拙者め何事も存ぜぬとばかり」

「むよそれで、よし、いかに別懇の間柄でも、とかく油断のならぬ人心、知らぬで通すが當世ぢや、はよよよ此後とも、さ心得て居よ」

「それにつきまして、申し上げねば心濟みのならぬ次第は、浅草田原町に住居いたさせ居ります拙者の娘が、をりから母の用事として訪ひ参つた路地口で、お客様と行き違うて後のこと、お供の奴衆がたゞ一人、娘方へ行かれて、さてくいろくの穿鑿めいた事」

「むよ路地口で行き逢うた後、その奴めが娘方へ参つて、むよ、じたい其方の娘は今年いくつぢや」

「とつて十九に相成りまする、幸ひ唯今も拙者めに用事あつて、お臺所まで、恐れながら呼び入れて其節の委細、直接に御聞取あそばしては」

「それ、面白いぞ、すぐ呼び入れて聞かうわ」

さそふ春風そよくと絶え間なく吹き渡れど、じつと梢を固めて何事も知らぬ顔の花一輪、名さへお露といふ、その露の假の宿りの浅草田原町に一人の母もろとも、父は去年の夏より駒形堂の片邊り然る歴々が隠宅の家守に傭はれて、定料の外に不時の賜物として屢々持ち歸る恩義を舟に、浪風あらしこの浮世を心易けに暮す恩人は、たゞ名のみ聞き及ぶ原様とやら、

お年の頃は三十四五、お國元には奥様のあるよしなれど、この江戸住居には女の童も召使はれず、まして人しれぬ隠宅にさへ女禁物の物固い御性分、人目には何とやら威高うて恐ろしけれど、さて物いへば飽くまで優しうて事にむづかしからぬのみか、言葉は淺うて慈悲ふかしくと、をりく父が物語りを聞かされたるお露、また父が恩義をうくる主なれば我身のためにも御主、せめて餘所ながら見たしくの一念も、人や咎めむ我としごろに恥ぢて今日まで、心一つに思ひ忍びし折しも、おもはぬ武家の奴が訪ひ來ての言葉に、どうやら此身を疑ふのみか、此身よりも聞き及ぶほどの物固き恩人にまでの濡衣、はて何として乾さむ術もなし、兎にも角にも父に打明けて後の事と、かの隠宅へ訪ひ行けば、今しも主人の君が來られしとやら、お露はツと思ひしが、所詮いはで止みなむも心苦しく、語れば聽て父より主人の君に傳へ主人の君より父に傳へて我身に逢はむとの仰せ、はて、これも何とせむ、

さりとして父が斯く恩義の人より招かれて、その子の我身が今更ら遁け歸らむ道もなしと、ひかるとまよ二階の一室に迂り入りて、やうく言葉の隙間に見上ぐれば、心のみかは容貌までも凡そ男の中の男振、花は櫻に人は武士の中で、の武士氣質と唄はるよほどの原田甲斐が、萬事うちとけて言葉やさしう物語る風情、あはれお露が目よりは如何に見えけむ何と思ひけむ、わかき女の身に用心すべきものは浮世の戀風、いつ何處から吹くやら誘ふやら、狼狽へた月下氷人は知ろしめさぬほどの不思議さ、まして吹かるよ身の戀は人間ぢやもの、

師走の月照り渡る兩國の百本杭に、試し斬の白刃を見むとて呼び止められ、その後は厩河岸の雨をついて此方より呼び掛け、小梅の朋輩を訪はむためと欺言の歸るさに、駒形の隠宅へ押掛け行きて謀らむとせしも逆様に謀られて遣り損ねたる無念のあまり、イツそ寢息を止めて首

持ち歸らむとせしをさへ、又もや空を打つての心外千萬、そののみか堀際に脱ぎ置きし衣服を取られて東天の空に素裸のまゝ遁け歸つたる菅野小介、固より生命一つは抛出物と覺悟せしに甲斐より何の音沙汰なければ不審の眉を擧めつゝ一室に閉ぢ籠つて思案に思案を重ねし結句、いざや此上は我より逆に出でて催促せむものと、繼上下の姿改めて原田が役宅の玄關口、「たのむ、たのむ」

取次の者いでて迎ふれば、小介さらに慇懃の腰を屈めて、

「御苦勞ながら御取次を頼みます、これは兵部家の馬廻りに菅野小介と申すもの、御主人さして御差支もなくば折入つて御意を得たし、かねて御存じの者で御坐れば」

口上うけとりて奥へ入りし取次の者、やがて再び出で來りつゝ、いざ此方へといふ案内に引かると小介が心中、吉か凶か死か生か、今日こそは無事に歸らず歸しもすまじとの胴骨おしす

ゑて、書院口に進み入れば主人の甲斐はや出でて待ち受くる體なり、

「これは、よくこそ、其後さて逢ひ申さぬ、幸ひ今日は閑暇の折柄、いざ此方へく」

宛ら十年の知己を迎ふるが如し、小介うやくしく禮を正し容をあらためながら、ふりあぐる面魂どこやらに物うち割るが如き顔色を含みぬ、

「恐れながら實は過日より必ず御叱りを蒙るべき筈と心得、萬事その用意いたして御待ち受け居りましたれど、其後さらに何の御沙汰もなき故、今日かくの推參」

「これは異な事をいはるよものぢや、本家の奉行役とて、事もなきに分家の足下を呼付けて支配せらるべきや、よし事あるにいたせ、兵部殿とて御自分の家來を我等に叱らせて其まゝ打過さるべき方でもあるまい、じたい今日わざく來られしは、足下が一料簡か、但し

は兵部殿へ届けられての上か」

「いや全く、小介め一人の覺悟にて」

「それは萬々不覺悟の至極ぢや、生死を預けまらすべき御主人を差置いて、みだりに我等が許へ、しかも吐られに來るとは殆ど狂氣の沙汰、はよよよ甲斐と醫者との門違ひせられたな」

「この小介を狂氣者と」

「念に及ばぬ、狂氣と見たぞ、狂者と見た甲斐を何とする」

およそ伊達家の藩中に彼奴はと睨まれし上は、遅かれ早かれ到底そのまよの無事には濟まざる原田甲斐に、物の證據を引上げられた言葉の質草むしられて生けず殺さすの中有に捨て置るよ心苦しさ、いッそ我より逆に押寄せて生死の境を定めむ、いざや生命一つを抛け出しての

は原田とて甲斐とて可矢八幡どればどの男ぞと、こゝに死骨おしするたる菅野小介が、頭上より狂氣者といはれて兩眼くわツと見開き膝頭ぐツと押し進めつと、あはや飛び掛らむ猛勢に迫れども、主人の甲斐は空ふく風の枝も鳴さぬ風情、たゞ片頬に笑を含んで悠々たるのみ、鬢の毛一筋も動かざりける、

「家例に依つて本家の奉行役たる原田甲斐に一應の届出もなき分家の新參者とやら、言葉を変むるぞ、こりや小介、其方じたい今日は何と心得て參つた、このほどより兩國百本杭の始末といひ厩河岸の雨中といひ、第一その夜の我を麻首にせむとしたる曲物、もしや兵部殿より前以て届出のある奴ならば同じ伊達家の藩中、忽ち捕つて其場に許すまじき筈ながら、この甲斐が目よりは浮世を渡りかねて狼狽へたる鼠賊と思ひ、無用の殺生あはれと存じて今日まで打捨て置くを有難しとも思はで、身の分際も辨へざる尾籠の推參者め、其處まか

り立て、睡れる龍の頤の髻を曳くとは汝がごと、此上ふしぎの目色を働かさば我手づからの白刃に勿體なし、蹴落して獄卒の手にかくるぞ、入らざる生命一つを抛け出すが男の膽と心得たるか、世にいふ溢れ者とは汝が比類、やをれ白痴め」

辯は流水、膽は満身、射るが如き眼光きつと浴せかけつよ、そのまよ起つて奥へ入らむとする袴の裾を、心機一轉の小介、するく〜と這ひ寄つて片手に押へながら、額を疊につけて言葉しづかに、

「もはや一言の申し上ぐべき筈のなき小介め、よしや獄卒の手に落ちて縛首うたるよとも覺悟の前の小介めに、あはれ、なほ再應の御教訓を願ひ奉ります」

「此上に何をか言ふぞ、さても死太い奴」

「はッ、恐れながら、鳥の將に死せむとする時は其聲悲しとやら」

「むよ死際の善言きけとか」

「御意に御坐りまする、此まよ御許しを蒙るとも、立歸つて長屋の片隅に腹かつ切らねば濟まね筈の小介、憚りながら唯の御一言、冥途の土産に致したく」

「兵部殿のことか、それならば安堵せい、たとひ我心の鏡に兵部家の野心いよく映ずるとも、人には見せぬぞ、他言せぬぞ、よしまた事に發し給ふとも、甲斐かくてあらむかぎり
は伊達家磐石、逆も叶はぬ道理を含め參らせて大事には及ばさぬ覺悟、しかと安堵せい、
草を敷寝の浪々より拾ひ上げられて俄の恩寵に感じ、かねてより一命を捧げ居る其方が心
體、善悪は儲おいて其段は武士ぢや、天晴れ手本になるほどの見事な腹十文字を残して死
ねよ、せめての冥利ぢや、ついでならば墓參いたして甲斐が一片の回向するぞよ」

「はッ、小介め申し上げずとも萬々御明察の通り、あはれ何卒、此上ながら主の身を」

「よい／＼、心にかくるな、さて兵部殿も惜しい事をめされたわ、其方ほどの奴を家門の忠義に追ひ使はれなば」

「その御一言、何よりの萬寶」

「唯よく切れ、最後の一念とりみだすな、さて汝は妻子あるか」

「親なし妻なし子なし友なし、まことに野中の一本杉」

「はふふふよよ氣樂な男ぢや、さらば」

「おさらば、御武運長久、草葉の蔭より祈り奉ります」

「過分々々」

人間どこまでも生き伸びむとすればこそ浮世の萬事むづかしけれ、あたらし生命一つ無いもの

として向ふところに凡そ何物の怖ろしかるべき、原田甲斐とて我と變らぬ男一人、智者にもせよ奇才にもせよ死際の敵手に委細はなしと、菅野小介こよに伊賀者の本性を現はして押掛け行きしが、さて膝突き合して逢へば何とやら臆病風に吹かるゝ心地して、今日こそと思ひ切つたる胸骨いつしか動き出しつゝ、いぶかしや斯くまで押し張つたる腸の縮むが如き無念さ心外さ、しかも咽喉佛の飛び出るほどに大口あいて笑はむとせし兼ての覺悟も、笑さへ一つ片頬に浮べ得ざりしのみか、何かは知らず頭上より物を浴びせられて背筋骨より冷水を注がるゝに等しく、我ながら夢うつゝに其場を去つて門外に出づるや否や、大息ほつと虎口を脱れし女童に似たる口惜しさ、えッ平生の小介どこへ失せたと我手に我胸を叩けど今更ら詮なし、打物とッて飛び込み來る奴は怖ろしからねど、疊に尻の根を生して顔色も變ぜぬ不敵者こそ怖ろしけれ、加之も我を忘れて腹十文字を約束せし無念さ、同じ死すべき生命ならば彼奴の面前

に事を起して死すべき筈を、南無三をめぐり生きて門外まで遁ぐるが如く立去りしこと、あはれ我ながら狼狽へたり血迷うたり、天魔にや取付かれけむ狐狸にや遣られけむと、流石の小介も、しをくとして歩み行く背後に聲あり、

「待てよ菅野、小介まで」

小介ふりかへりて見れば、辻番所の物陰より編笠に著流しの浪人めいたる大男、大刀に反をうたせて力足ふみつよ、のそくと歩み寄りぬ、

「めづらしや小介、見れば繼上下に腰印籠の華奢、さても其後よい主取でも仕やツたな」

「や、誰殿で御坐る、言葉に伊賀衆とは存すれど」

「國を忘れぬだけが殊勝ちや、七年以前、おぬしが名張城下を出奔の砌、君命の仕手に選ばれて返討になつたる吉田」作の舍弟、周作が見参しようわ」

小介はツと思ひしが、折も折なり時も時、生憎の奴に見付けられたりと、靜に言葉を和らけて、

「はて思ひもよらぬ珍客に出逢うたわ、委細承知、いつ何時にても御存分次第、追手にかよつた御舎兄を討つて立退いた菅野小介、はよよよ遁げ隠れは致さぬ、なれど今は主持の身、みだりに大道の勝負もなるまいぢや、ともかくも拙者の宅まで、はて外に友もなく家來もなき獨身者、助太刀は天井裏の鼠ばかりぢや」

いはど我ながら愚に返つて狼狽へけむ、隙間もなく言ひ伏せられて本心にもなき腹十文字を約束しつよ、やうく甲斐が門を出づるころ南無三はツと思へども、今更ら男の一言なんと打消さむ詮もなし、よしこよに大事の前の小事とて我みづから我男を潰すとも、必定あれほどの甲斐をめぐり潰さして置くべきや、よく切れ美事に切れ聽て墓参せむとまで念を押せし言葉

の裏面には、たしかに急所を遁さぬ彼奴が眼色、はて何としてくれむ、あたり生命の捨場を失うたる今更の無念心外、さすが不敵の小介も聊か度を失うて、思案に暮の鐘をきよつと歸る背後より、不意に呼び掛けたる奴また時に取つての難物、七年以前の兄が怨敵とは重ねくの珍事、あはれ一つの生命を持て餘して入らざる墓場二個所を作りける無念心外、されど現在こゝに兄の怨敵と呼び掛けたる奴、いざ伴うて機よくば毒を薬に我手に味方とせむ、場合あしくば返討になすとも容易き業、生死の境に我を弄んで手鞠に取るほどの甲斐に較べては小兒に等しき敵と、慇懃に件うて兵部家の裏門より自己が長屋に引入れつゝ、召使ふ一人の奴さへ餘所へ追ひ遣つての膝と膝、

「仔細あつて生れ故郷を立退くほどの我、夢さらく振返つて御手向ひこそ致さね、たとひ君命とて追はるゝ仕手の白刃そのまゝに受くべきや、古今ある慣ひの武士が意氣地、されど現在に兄御を討つたる段は相違なき菅野小介、今更ら御舍弟の足下に對うて口論は仕らぬ、先刻も申せし通り、いつ何時なりとも御望み次第の勝負々々、なれど今は小介かく主持の身で御坐れば、こゝ暫時、長うて六日か七日の間、差上ぐべき一命を借り受け申したい周作殿、いはゞ互に竹馬の友ぢや、これほどの義は聞き濟んで貰ひたい、もし不用心に思召さば、此よし主人まで御届け置かれても宜いぢや」

「いや、ところ定めぬ浪人なれば片時も許すまじき筈ながら、かく主持の身として長屋までも見届け、しかも御主人に届け置いても差支ないと申さるゝ上は私の喧嘩口論より引起した怨恨の間でもなし、君命に依つて仕手に選ばれたる兄、その兄が足下よりも業の劣ればこそ、よろしう御坐る、七日の間お待ち申さうわ」

「七日の後は、この首さしのべて押斬にせらるゝとも」

「はよよよよと我また兄の後を追うて返討にせらるよとも」

たれ憚らぬ肱を枕に心のまよの讀書三昧、餘所へは聞かさぬ自己が膝を軽く叩いて中音の小
謠、ゆく水の清き流れに對うて曉の煎茶、夕暮の棧橋に出でて戯れの魚釣、これぞ駒形の
隠宅を構へたる甲斐が無上の快樂なりしが、老いたる男手に嘸や朝夕の不自由ならむとて、
父の手傳ひに人しれず通ふ娘の露、いつしか甲斐が来る毎の消えも入りたき姿おのづから目
に止りて、たま／＼釣りし小魚の忽ち膳に上るを誰が味つけしと聞けば、家守の老爺が皺と
笑とを一つに寄せて、あれ女が無調法の手業と答へつよ、果は呼ぶともなく呼ばるよともな
く食事の給仕に出で、をりからの無人に幸ひ夜具の上げ下しにも、まめ／＼しく立働けば諸
も見る目に一入うるはしきもの思ふ心に一入やさしきもの、さしあたりて急ぐべき縁もなけ

れば暫時こゝに來て父の手助けせよ田原町とやらに母一人さびしくばそれも呼べと、甲斐が
慈悲の言葉しみ／＼身に染みて後は、父よりも母よりもお露いつしか近く馴れて遠き行末の
事までも打明けしやら、水に音なく燈火しづかに夜更け人定まりし甲斐が枕頭へも、めされ
て物を運ぶ露が風情に忍ぶ顔色さへ無きほどとなりぬ、

さもなき時さへ妾と疑はれし兵部の許へ、かくなりし後に押隠して腸しほらるよも策略な
きに似たりと、まづ本家の同僚に季細うちあけて内届をせし上、あらためて分家への申條に
は、甲斐こと日夜の御奉公に油断なく相勤め候へども、元來不肖の身にあまる重職の事と
て、近來いさよか身體を損ね候まよ、御免を蒙りて駒形の片邊りに妾宅を構へ申し候、もしや
御通行の際は見苦しく候へども、御立寄の榮を賜はりたく、此段御前への執達よろしく願入
候との文言、家老の許まで届け置いて兵部殿こよかし逆様に一泡ふかせむとぞ待ち受けぬ、

世に憚るべき事なき時は悠々と白晝に大手を振って通ひつゝ人目を忍ぶべき事ある時は忽ち首を縮めて足音さへも盗むが如き世上の習慣ながら、ことに原田甲斐といふ當世の逸物、辨之助の昔より才智ほどばしりて萬人に勝れたる不敵の膽魂その身の丈と共に伸びくゝて三十三の今は奥州五十四郡の江戸一切を取扱ふ奉行役、もしや他家ならば日夜間斷なき内外公私の劇職に天晴の家老たしかに十人の額を鳩めて勤むべき活動を、おのれ一人に引受けて悠々たる閑日月を弄ぶ風情、しかも隠さでよきころは人目しので通ひながら隠すべき今この妾宅に届けの上の籠乗物を横づけの奇骨、さてこそ伊達家の名物男とて戦國に生れざる太平の身を惜まれぬ、

今日も駒形の妾宅に浮世の定紋ついたる上下を脱ぎ捨てよ、例の露が描ける如き花の風情に酒を過しけむ、床柱に身を持たせて片手に物の本を繕きながら、酔後の抹茶一服、あゝ萬金に代へ難し山海の珍味ものかは、さても心地ぢや、露よ來て語れ、また呵しき談話せよと片頬に笑を含めば、いつしか馴れて今は世にあるかぎり冊きまるらせむ君、けに女なればこそ賤しき身に斯ほどの人を勿體なやと、戀の外なる心の眞實あらはれて餘念なき姿には、さすがの甲斐も尋常の男なりける、

「なう露、およそ世の中に人の快樂といふもの、第一、何でがなあらう」
 「ほよよよとむづかしい事の御意、それは殿御と女子の差別あるやうに」
 「なるほど、さうぢや、さらばまづ和女が目からは男が第一の快樂なんと思ふぞ、もし言ひ當らば、我も試みに女が快樂の星を指して見ようわ」
 「女子も女子、妾風情の賤しい目では逆ものこと、なれども花は櫻に人は武士とやら、殿御には其お武家の中の名譽かと」

「はよよよ世諺から言へば然もあらうが、我等また武士は大の嫌ひぢや、よく思うても見よ、むづかしい主を持つて掛替もない大切の生命を進上申した上に、やかましい式作法に縛られて一門一家さては友朋輩への義理づくめで、や、禁物々々、わすれても臆病風に吹かれぬ日夜の用心、ゆめにも油断なるまじき人斬庖丁の手前もあつての、あはれ生涯の間さらかに枕も高う寝られぬのぢや、これを思へば世に町人ほど羨ましいものはない、いざ生命の瀬戸際も天下湧物の黄金で濟むこと、はよよよ和女なども不仕合せの一人、なんとして怖しの武士に縁を持つたぞ、同じうは有徳の町人に册けば萬事その身の爲であつたものをなまなか我等に随うて可哀や、我等もし大事に出逢うて一命すつる時しもあらば和女なんとする、あはれ今のうち身の暇を呉れうか喃」

いはれて露は其まゝ無言に顔を背けしが、果は怨めしの色を含んで、俄に立去らむとする後

姿

「いりや露、どこへまるる」

「はよよと天然とやらへ」

國元に妻を残して此大江戸に伊達家の奉行役たるほどの身が、女の童さへ召使はざる不自由の男世帯とは不審なれど、探れば果して駒形堂の片邊りに人しれぬ隠宅、さてこそと忍び姿に訪へども更に其影なければ、案に相違の歸りがけ路地口で行き逢うたる女、されば流石の彼奴も最早遁れぬところと思ひけむ、近來わざく今更に妾宅の披露せし呵しさよ、あはれ甲斐ほどの男も此道には聊か前後を狼狽へたり、いざや押掛け行きて幸ひの弱音より附け入りくれむと、俄に屋形船を漕ぎ出せし伊達兵部が心には、今日こそと思ひ込んだる年來の一物、

たしかに開くべき時節到来と喜びぬ、

船に従ふものは菅野小介と、いつぞや召連れたる下郎とのみ、早くも指さして、あの棧橋こそといふに、船頭そのまゝ棹を止めて漕ぎ寄せれば、下郎まづ上りて木戸口に立ちながら、

「原田殿、昨夜より逗留めさるゝよし慥に承はつて、淺草參詣の船ついでに伊達兵部が立寄り申した、家來衆こゝ開けさつしやい」

をりしも甲斐は二階の欄干に肱を持たせて、物の本を読みたりしが、棧橋の聲をきいて倅こそと心の一笑、まづ家守の老爺を呼んで裏木戸を開けさせながら、身は袴をつけて庭口まで出で迎へば、兵部たゞ一人、

「はよよよと不意に參つて迷惑でがな、ちと休息いたしたい、さてもよい景色、いはゞ俗中の大雅、市中の仙境とも申すべきぢやの」

「はッこれは思ひもかけぬ御入來、見苦しくとも、いざ此方へ、して御供の衆は」

「いや〜下郎ばかりぢや、船底に残し置いた、さてお身も一人かな」

「隠宅の義で御坐れば、拙者とても唯一人」

「それは幸ひ打ち解けて語らうわ、とかく浮世の始末に表面立つては萬事をかしようないもの、就いては自然の閑室で、ちと折入つて、段々お身の智慧を借り申したい義もあるぢや」

「隠宅の義は世間の手前まづ鳥の塙も同然、従うて身も御奉公の外なる不用の甲斐で御坐れば、萬事に御心置なう」

「満足々々」

やがて兵部を二階の一室に招じて、甲斐が手づからの抹茶一服、主客ともに打解けたる世間禮儀の外ながら、互の胸に一物あつて加之も分家の主人と本家の支配役、何とやら一語一句

に心を配りて用心堅固の體なり、

「かく不意に參つて異な事を聞くやうぢやが、我等このごろ召抱へた新參に菅野小介と申す者、知つておじやるかの」

「菅野小介、どうやら聞いたやうにも御坐るが、儲しかとは」

「むと臈けに知つて居らるゝとか」

「まづ殆ど夢うつゝのやうに」

「これは思ひもよらぬ案外の返答に逢ふものぢや、何を隠さう、あの小介が申すには、去年の師走には兩國の百本杭、ことしの初春には雨中での厩河岸、かつ二度とも、お身に招かれて膝まで突き合はしての談話もあり、また聊か其間に呵しからぬ義もありしとの事、現に過日は、公然にお身が屋敷を訪うて如何なる仔細やら腹十文字の約束をいたしたとか、それ

に就いて兵部みづから懇談したい筋あつて淺草參詣とは虚偽、實は今日お身の當家に居らるゝを知つて、わざ／＼斯く推參したぢや、知らるゝ通り萬事むかしながらに一本調子の我等、ひらに打解けてほしいぢや」

「あくまで御遠慮申し上げて、わざと知らず顔にと存せしを、さほどまで委細に仰せらるゝ上は、甲斐あらためて伺ひたき一事あり、そも／＼小介と申す者、しかと御召抱に相成りましたる義か、もし御召抱となりしからは、拙者また朋輩も同然、相應の辭義も致さで叶はぬところ、御家例の御届けないが故、たゞ下司下郎奴みだりに御名前を偷み奉る不届者と存じ」

「いや／＼其段は我等の手落、そと勘辨せられて、あの者の義を」

「はッ、さらば猶更ら以て恐れながら御不足申し上げたき仔細」

「定めて不足も小言も、いはるよものと覺悟いたして參つた兵部ぢや、おもふまゝ無用心に言はれい、はよよよとかく萬事に埒もない性質、我ながら平生も後悔ばかり、それがため智者のお身に今日わざ／＼聞きたい事があつての」

侍品として召抱へたるものは必ず氏素性を本家の奉行役まで届け出づべき筈なるに、一片の届さへなき菅野小介さらに眼中に置かざる下司下郎と憚りもなき甲斐が言葉に兵部も今更ら首肯いて、なるほど／＼我等が越度なり、さらばその越度を許されての上の小介に就いて、いさよか懇談したしとの一言に、甲斐また膝を進めて額越に笑を含みつよ、

「新參ながら、それほどまでに思召す御家臣の菅野が、去年以來さまざまにこの甲斐を追ひ廻さるゝ仔細、第一に御存じ無くてやは」

「勿論のこと、我等承知の上ぢや」

「御承知の上とは、じたい如何なる仔細あつて」

「外でもない、お身が心體を試し見て後、この兵部が家にも身にも代へ難き一大事の頼みを」

「これは千慮の御一失、不肖ながら甲斐が心體は新參者の彼等に然まで事むづかしう仰せ付けられずとも、はや既に御存じあるべき筈、よしまた御存じないにも致せ、彼等風情が兒戯に等しい策畧にては、知らせじと思ふ事いかで容易く、はよよよよまた過日も小介ふら／＼と參りて、甲斐なんとも申さぬに、おのれから進んで腹切る約束いたせし體、とんと狂氣の沙汰、さても好奇の男よと存じたばかり、齒の根に残る飯粒ほどにも心得ぬ甲斐へ、わざと斯く御自身の御懇談とは、じたい如何ほどの御大事が」

「いや然いはれては我等まで赤面の至極、なれど甲斐お身ほどの男は當世に格別のこと、そこで小介め、いさよか狼狽へて前後取亂したと見えるわ」

「御言葉ながら、甲斐づれが面前にて取亂すほどの臆病者、そもく何の御用はしあつて、御召抱に」

「いや、それにも別段の仔細あること、ところで小介め、たとひ狼狽へたる一時の切迫とはいへ、かりにも男が切腹の約束」

「その邊の御懸念は御無用、甲斐が目より男と存ぜねば、また約束も唯一場の座談と致してさらにく、とかく世の中に口は禍の門とやら、分際にもない入らざる男達して忽ち後悔の責苦に逢ふもの、はよよと申さば氣の毒千萬」

たよみかけて隙間もあらせぬ甲斐が辯舌に、さすがの兵部も兼ての覺悟どこへやら、おもはず吐息を洩らして暫し無言の體に、こよごと甲斐が一入さらに膝を進めつよ、

「餘談は儲置き、恐れながら甲斐つらく御顔色を伺ふに、何とやら御不快の體、もしや御胸

中に深く思召し立ち給ふ事ありながら、その御大事の俄に叶はせ給はぬやうの次第が」

甲斐が此一言ながら兵部の胸に白刃を貫くが如し、

伊達兵部が裏河岸より舟を寄せて不意に訪ひ來し心のうち、はや其事と悟つて、いよく慙慙に招じ、ますく禮を立つるが中に、おのづから鐵壁を築いて打ち込む隙もあらせず、さりとて言葉の花を抓るでもなく、剛柔こもく取交せて、遠きが如く近きが如く親しむが如く疎んずるが如く、笑を含みし甲斐が不思議の辯に流石の兵部も度を失うて、舟底に忍ばせし菅野小介を呼び上げ兼ての用意も水の泡、まして例の下郎を召して田原町以來の因縁より妾を弄ばむと巧みし洒落なんどを出さば、此上いよく逆に捻つて如何なる振舞せむも圖り難き面魂、兎にも角にも今日の長居は無用と、そのまよ舟を急がして漕ぎ行く風情を、棧橋まで見送りし原田甲斐おもはず兩眼に涙を含みぬ、

さてもく、あの御人體にて、この太平無事の世に一方ならぬ年來の野心、あはれ龍車に對ふ
 蟻螂の斧かや、所詮のこと及びもせぬ夢うつよの業、いたはしや英名四海に轟いて鬼神も避
 けし政宗公の御遺子に、不覺も不覺あれほどの不覺人あらむとは、わづか一の關の内證高三
 萬石にて捨て置かれしも其咎ながら、また現在の御身にしては道理至極、はや鬢に霜降る今日
 まで嘸や日蔭の境涯を口惜しう思召さむ、それにつけても大望の第一に此甲斐を指されて
 我なくば斯る野心の逆も成るまじきものと思ひ込み給うて、宛がら戀に狂ふが如き近來の御
 有様、思へば何とやらむ痛はしの君かな、

伊達兵部が駒形の隱宅を訪ひてより七日目の朝、原田甲斐が許に私事なればとて竊の使者、
 そも誰殿よりと問へば答へて曰ふ、大老職酒井雅樂頭ちきく、今夜御意得たし、

物に動ぜぬ甲斐も流石に驚きぬ、當時天下をあづかる權威無上の下馬將軍、しかも銳氣豪放
 の活達人と聞き及ぶ人が、わざく、陪臣の甲斐を招ぐに竊の使者を以て慇懃に御意得たしと
 の口上、かつは時刻もあらうに夜陰の 出會、奇怪々々、もしやと兩眼を閉ぢて思案に沈み
 しが、公にもせよ私にもせよ行かで叶はぬところと、其日の夕暮より驚脇の兩若黨に草履取、
 身は麻の上下に心は進退の二つ、しづくと練り出して下馬先の酒井が大門に對ひぬ、あは
 れ伊達の一名物が善惡の蒼なりける、

表御門は下馬將軍とて諸侯の鞍置馬たえまなき勢ひに飛ぶ鳥おとす天下の大老職、裏門は世
 に傳ふ酒井の一癖とて何事も言ひ出せし事は弦を放れし箭の如しと聞き及ぶ活氣の大名、殿
 中には其日の目色に千代田の城の晴曇ありとの風聞しきりに前代未聞の權威たる雅樂頭、
 もし主家に關しての公用ならば一片の奉書を以て白晝の稻妻に似たるべきを、懇命わざく

使者をもて内殿ふかく夜陰の出會とは、加之も正しく分家の兵部とは相舅の間柄、このほどよりの兵部が振舞に思ひ合して猶更の奇怪々々、
 旗下ならば天下の直参とて一握りの知行取さへ正面の大門を開かすべきに、情なや陪臣とて八千五百石取伊達家の名物と聞えたる歴々の武士が、門前に駕を乗り捨てつゝ兩若黨を差置いて草履取の奴ばかりを随へ、しかも脇門より内玄關に向うての案内を乞ひぬ、
 されど兼て設けし今夜の珍客とや、取次の諸士まで殊更に慇懃の體、まづ書院に招じ入れて茶菓の運びも諸侯の待遇に等しく、やがて導かれて虹の如き長廊下を渡りつゝ、奥ふかく殿中の一室に入れば、左右前後に銀燭の光輝まばゆく、正面の尊に坐したるは館の主人雅樂頭、年輩五十前後の大男しかも大名生育に似合はざる武邊流の骨柄おのづから威義を正して座にあるものは坊主と小姓の外に影もなし、さてこそ格を破つて膝談合のあらむ體ぞと知られぬ、

甲斐しづかに座を隔てよ身を伏しつゝ、

「お召しに依つて原田甲斐参上、まづ以て御恙もあらせられぬ體、憚りながら御恐悅を申し上げます」

白晝の如き銀燭に雅樂頭つらくと見入りて首肯きながら、

「や、聞き及ぶ伊達家の名物男、早速來られて満足ちや、さ近う、近う寄られい、今宵は雅樂が少々きよたい事があつての次第、さ近う我より座を進めようかな」

館の主人は當時將軍の目代たる天下の大老職酒井雅樂頭、まして其舌一枚の活動は金城鐵壁に勝るとぞ風聞に高き活達人、まねかれて参上せしは日本三大名の一なる奥州伊達家の名物男原田甲斐、陪臣ながら辨之助の昔より諸家他門にまで聞えたる絶群の不敵人、しかも座には茶に通ふ坊主と目色に動く小姓の外は仔細らしき者を遠ざけて、たゞ燈し連ねたる銀燭の

光輝まばゆく、寂として蟲一疋の這ひ出づる影さへ明かに數ふべき中に、心と心の一物を含み合うたる主客の氣色、いとど物凄かりける、

「聞き及ぶ伊達の四十八館といふ小舅を持ちながら、わけて家例格式の事むづかしい江戸一切の奉行役を勤め公私萬般の支配を一身に引受けて、さのみ心勞の體も見えざるとは流石の名物、九州原田の嫡々ほどはある、あゝ伊達殿は善い家來衆を持たれて羨しい事ぢや、當年とつて幾歳になる、公儀への届書には二千石とあれど、かくれ竿の多き奥州筋、實の取高は幾何であるな」

飴を舐らすが如き雅樂頭の言葉に、狼狽へて舌打なさは忽ち今夜の大事ぞと、甲斐よく謹んで容を改めつと、

「恐れながら政宗以來の家法として、何事にも底を叩いて物を出さざるの例に依り、まづ甲斐風情の乳臭き者が却つて重役に備はりまする一義は、もし誤つて一死を賜はるとも家に取つて惜しからぬ深意、第一は公儀へ對して忽ち後の二の手に御奉公の缺けざる主意、此處いさゝか他家様とは格別の次第にて、申さば血祭坊主にも似たらむかの役目に御坐りまする、また甲斐こと公儀への御届けは憚りて二千石と申し上ぐれど實は八千五百石、これさへ身に餘る不思議の重恩たゞ日夜おそれ謹んで罷りある分のこと、年齢だけは世間體に劣らず一年を一年として三十三歳」

「いや、それは謙讓の一言、全くは然うであるまい、雅樂頭よく存じて居るぢや、よしそれにしてからが、聞けば實の取高二萬三萬の者も多くある伊達家に、甲斐ほどの男が八千五百石とは廉い、あはれ天下の拾ひ物、世の義理なくば其分で差置くまいもの、この雅樂など一番に所望いたすの、我等が肝煎つて直參に推すとも一萬石には粟粒も缺かす

まい骨格ぢや」

「これは冥加至極の御言葉、勿體なや誰あるべき當時天下の御政道を取捌き給ふ御口より、みるかけもない陪臣の甲斐づれを世に押し出しての一萬石とは」

「もし執心ならば肝煎ッて取らさうかな、むづかしい事はない、伊達殿には我等また申譯の筋道しかとあるぢや」

「はッ、御袖の端に縋りてなりとも一代の面目、偏に願ひ上げ奉るべき筈ながら、全くは御前、この甲斐奴を御買ひ被り遊ばされての御迷ひ、まづ此分にて御捨て置き下さるよやう、なれども只今御一言の恩義は甲斐、幾久しう感銘いたしまする」

「や、それもその筈ぢや、その忠心なうては伊達家の名物とも唄はれまい、道理、道理、時に分家の兵部義は知る通り我等いさよか縁類のもの、何かと定めて世話にあづからうわ、

此上とも宜しく頼むぞ」

「はッ、仰せまでもなき事、及ばすながらと御受け致すだけが却ッて恐れ」

「満足々々、さてその兵部に就いて、我等より頼みたき一條、聞き入れてくれまいか」

「何事によらず、伊達綱宗の家來原田甲斐として一身に叶ふほどの義で御坐れば」

たゞ身に叶ふほどの義といはず、伊達綱宗の家來原田甲斐としての一身に叶ふ義ならばと、面を正して言ひ放ちたる一言に、流石の雅樂頭どうやら箭の外れし心地しながら、こよぞ世に聞えたる權威無上の活達豪氣、もし事ならずんば生けて歸すまじき目色の鋭さに、さらば席を更めむとて猶も奥ふかく後園の茶室に伴ひながら、銀燭の萬燈に代へたる一穗の燈火、爐を圍んでの主客の間に人もなく、手を伸ばせば互の咽喉元を掴むも自由なり、

「甲斐、あらためて言ふまでもなく、兵部ことは我等と相舅の間柄、子息の市正は我等娘の

婿ぢや、また伊達家に取ッては正しく中興の祖たる政宗の一子、さるを一の關わづか三萬石の内證高にて鬢に霜ふる年輩まで其まゝ捨て置かむこと聊か不惑に存する、其方が活動で何とか工夫のないものか、公儀は我等いかやうとも扱ひ得さすものよ、現在の本家より願意の筋も出さぬを我等が無用の指圖も出來かぬるぢや」

「はッ、仰せまでもなく、家來筋にさへ三萬石の城持もある家柄で御坐れば、猶更その義に就いては及ばずながら甲斐め、年來さまづくに工夫いたし居りますれど、何分にも政宗が定め置かれし義に御坐りますれば」

「たとひ現在の父たる政宗が定め置かれしとて、なほ戰國の餘波も消えぬ折柄、それは公儀へ憚ッての次第、今この太平の世となつては別段に遠慮も入らざる時節ぢや、さるを政宗が定め置いたとて残る形見の一子を家來筋の者どもが其まゝに捨て知らず顔は、却ッて中興

の祖たる政宗の靈に對しても不心得の一事であるまいか」

「段々の御意、深く恐れ入ります、つきましては如何やうに願ひ上げて宜しきや、公邊の義は陪臣の甲斐づれ甚だ不案内に御坐りますれば」

「なれど甲斐、それ位の見當は其方ほどの男ぢやもの、雅樂が指圖せいで心づくべき筈、まづ立歸ッて、とくと熟考せい、はよよと熟考いたした上で別に雅樂が料簡もあるぢや、何分に兵部が義に就いては重々たのみ入る、や、名物々々、今夜の言葉取に依ッては雅樂いさよか目色を變へでは濟むまいと思つたに、案外の柔和に出られて手持無沙汰となつたわ、はよよと」

「たとひ如何やうの御意ありとも、陪臣の甲斐が天下の御大老に對して苟くも不心得の義が御坐るべきや、まして仰せの段々は道理至極の御意、たゞ恐れ入ッて恥ぢ入るばかりの

外は」

「むよ成程、成程」

東北の草叢より動き出でて機會よくば天下取にもならむとせしほどの英傑、その政宗が残る形見の一子として鬢に霜降る年輩まで僅に一の關三萬石の内證高とは氣の毒の至極、まして家來筋にさへ城持のあるべき伊達の家柄なれば、本家より願ひ上げて何とか工夫せよ、兵部とは相舅の間なり子息の市正は娘の婿なり、公邊の義は固より我等が萬々承知との一言、なるほど、底を叩いて唯これのみの義ならば更に仔細なく、かつは飛ぶ鳥おとす大老職が縁者を思ふ肝煎として必定あるべき筈の事ながら、あはれ雅樂頭が我を招きし眞實の心中、よもや斯ほどの小事にてはあるまじ、いはどこの甲斐が舌の動き鹽梅を試したる今夜の目色、いづれ二度三度かさねくに招いて後は聞き及ぶ例の酒井が一癖わきいづるほどの本音を吹く

べし、その時こそは伊達一門の盛衰に關すべき一大事、原田一族が生死二途の境目、さても兵部に事むづかしの後楯を持たせけり、

下馬先の大門を立出づるや否や、吊らせし駕に打乗りて六尺の足と共に思案を運ぶ折しも、若黨が竊に聲をかけぬ、

「あの前途より此方への供勢は提灯たしかに御家の御紋所、いかど計らひませうや」

甲斐はツと思へども、言葉しづかに扇子もて軽く叩きながら、

「御家の紋所とは申せ、夜分に御他行あるべき筈なし、それは必定あの分家殿でがなあらうわ、なれど今更道を外すに及ばぬ、近づいたらば駕を止めて慇懃に會釋せい、必ず急くな〜」
やがて近づけば、甲斐みづから内より駕の戸さつと引開けて、主筋ながら内證高の分家、家來筋ながら江戸一切の奉行役、飛び出でて伏するにも及ばず、奴が直す草履に片身もろとも

片脚を差載せつゝ、若黨をして慇懃に挨拶させぬ、
「これは御家門の兵部様と心得まする、原田甲斐、只今さる方よりの歸途、此まよ御免を蒙りたし」

主の意を受けたりけむ兵部が駕脇の徒士すよみ出でて、

「いかにも分家で御坐る、甲斐殿この夜分いづれへ行かれしぞ」

「外ならぬ御方故に申し上げまする、今夜そと下馬先の御屋敷へ招かれて参上の歸るさ」

この時に駕の内より兵部みづからの聲、

「酒井家へとは珍らしい事ぢや、我等が爲には餘所ならぬ御人いかやうの仔細あつてか、途中ながら聞き申したい、夜陰の参上なりや定めて急の内用であらうわ」

今は甲斐そのまよ駕を出でて進み寄りながら、

「全くは御身様の一條、なれど吉事の仰せ段々、まづ甲斐改めて御祝儀を申し上げます」

「や、それは重疊の満足、して如何なる事で」

「あまり途中は萬事の恐れ、いづれ御屋敷へ伺うての上」

「さらば大儀ながら、これより直ぐ來られい」

「もはや夜深に御坐りますれば」

「いや、此まよの入來を待つ、それ駕やれい」

故意とか、故意とならぬか知らねども、今夜の甲斐が心には、呼び寄せられし大老の酒井雅樂がために一の手を責められ、今また途中に出逢ひし兵部がために二の手を責められたるが如く、いづれ三の手の奥もあるべき様子、されど斯くなりての上は何をか恐れ何をか憚らむ、傳へくして磨し得たる九州原田が嫡々方寸の鏡

いざ然らば夜陰ながら此まよ御供いたさむと、兵部が駕に從うて我駕を進めやりつよ、やがて奥ふかき一室のうちに主客さし對へば、兵部殊更に慇懃の待遇、甲斐殊更に謙讓の體、

「今夜酒井家へ召されて我等が身にかよりし用談とは、じたい如何やうの義でありしぞ」

「いや、別段、これを改めて申し上げべきほどの義でもなく、いはど伊達家の重役どもを内々お叱り遊ばされし次第、まづ第一が、お身様を一の關の内證高わづか三萬石にて今日まで捨て置くとは不心得千萬との仰せ、第二には、この甲斐奴に何とか工夫して願書を差出せよ公邊の義は固よりとの御意、たゞ恐れ入って其まよ慥に御受け申し上げ」

「いや、それは却って迷惑ぢや、なるほど酒井家は近來我等と餘所ならぬ間柄なれば、然いはるよ芳志のほどは萬々、また其場で慥に承知された足下の芳心も満足ながら、分家の我等こゝに聊か肥えたりとて本家の身に瘦せが見えては更に心地よからぬ、同じ伊達の一門

一家ぢや、當分は先づ此まよでく、はて内證高が表高となつて五萬十萬に増せばとて、もはや我等の年輩で行末どれほどの榮華名聞を保たるべきや、大名とならば國司と呼ばれてこそ白髪の花ともなれ冥途の土産ともなれ、さなくば三萬石の内證高が却つて安樂ぢや、はよよ古今の英傑といはれし太閤にも心を置かせ凡人ならぬ神君にさへ憚られたる日本一の武邊者伊達政宗が一子に、生涯を馬草料にも足らざる知行で死に果てし者ありと後の世に唄はるよが、せめての本望ぢや、ことしの冬には子息市正に萬事を譲りて、我等は圓頂黒衣、高野の奥に世を振り捨てむかと思ふ折柄、いかで本家の知行先を削つて快かるべきや、其段は無用々々、されど我等もし世上を脱れし曉は、あとに残る市正が事、只管ら頼み入るぞや、奥州五十四郡に頼むは足下たゞ一人、あはれ嫌ぢやく此ごろの浮更ら」

世を怨むが如く訴ふるが如く語り終つて大息ほつと吐けば、さてこそと原田甲斐おもはず膝を進めて、

「こは存じも寄らざる不思議の御意を承はる、今夜こゝに參上して斯る御事を聞きまらるせむとは今の今まで、もしくは甲斐奴を弄び給ふ一場の御座興にや」

「いや座興でない、兵部は神もつて斯く思ひ極めた、白髪之交る年まで三萬石の内證高で捨て置いたは不慮の事、せめて本家の甥が喰ひ餘りを分けて死際の満足させむなどと、今更ら俄に下司奉公の老を慰めらるゝが如き體、兵部なほさら一段の無念ぢや」

「さりながら、そはまた餘りの御急腹」

「いや〜一念もはや返さぬ、甥の綱宗に傳言たのむ、兵部がために一本の竹杖と一枚の麻の衣を贈れと、たしかに傳へてくりやれ、酒井家へは我等また別段に罷り出でて言ふべき

事あり、今夜は此まよ、いざ然らば」

いひつゝ起つて奥へ入らむとする袖を、掴むべき甲斐さらに掴まで其まよ見送りつ、やがて閉ぢたる兩眼くわつと開きながら、

「御家來衆おはさぬか、御家來衆、館様ちと御氣分あしき御様子ぢや、御手醫者めしませ、

原田甲斐このまよ御免を蒙つて罷り歸る」

飛ぶ鳥おとす大老の權威、しかも大名中の横紙破りと聞えたる雅樂頭に、伊達のためには分家たり我等が爲には縁者たる兵部を世に出すの工夫せよと迫られ、また現在の兵部は飽くまで拗ねて怨むが如く怒るが如く、浮世は嫌ぢや身は黒染の高野の奥に遁れむと迫られ、流石の甲斐も茲に一思案の首を捻らで叶はぬ次第となりぬ、

兵部のみならば、あるほどの智慧を絞り、あるだけの力を盡して、千變萬化たとひ如何なる策略を廻らすとも、原田甲斐かくてあらむかぎりには伊達家の大門に蜘蛛の巣一條も曳かすまじけれど、宛がら當時の天下も心の自由なる雅樂頭が後楯とは、あはれ事むづかしの仔細となりけり、

酒井家といふ三字に大老職の三字を合せなば、南無阿彌陀佛の六字よりも利目あるべき今の世に、うかくこの一條を藩中に知らせむこといと危し、さらば先づ我胸一つに藏めて、みごと切抜くる方便なるとしてくれむ、

一身の義ならば生命の際に及ぶとも駟聲ことに雷を欺くべき男ながら、事は相傳の主家に關して一步を誤れば忽ち盛衰興亡を來すべきの基と、さすがの甲斐も其夜は夢も結ばず、朝とくより役所に出仕して當日の用辨を扱ひつゝ、またもや例の唯一人ふらりと立出でしは何處、か

かる時には猶更に我ための別天地、市中ながら水清く青葉しけれる駒形の隠宅なりける、

家守の老爺が無心の満面に笑を浮べて言葉までも質朴なる體、娘の露がこほると愛敬を湛えて我しらぬ色香を含む體、さては逝く水の流ると景色につれて棹さす船の通ふ風情、近くは中庭の吳竹に囀る雀の聲も因縁なきにしもあらぬ身を窓に倚せて、水際の松の隙間より川を隔てゝ厩河岸の描ける家々を見渡せば、腰の兩刀さてしも一しほ重けの心地しぬ、

あれ、いつにもない、お髪の亂るゝこと、不束ながら搔き上げまるらせむといふ露が言葉に、ことでは甲斐も尋常の男なりけり、さて亂るゝは髪のみならねど、おぬしの手に合ふほどの事は頭髮なるべし、ついでに剃刀をも添へて、撥鬚奴なり豆本田なり、障子鬚の町奴風なり雲州たばね、若衆形、はよよといづれなりとも我この面體に似合ふやう心まかせぢや、心まかせぢや、

戦國に英雄の心みだるゝ時は殊更に田夫野人と語つて自ら慰め、太平の大丈夫が思案に沈む時は兒女に戯れて憂きを遣るとは、古今ある習慣のこと、こゝに原田甲斐が主家の盛衰に關する大事を控へて心に寸隙なき折しも、却つて駒形の隱宅に一日一夜の凡夫となりつゝ、草履取の奴たゞ一人めし連れながら、ふいと立出でて屋敷へ歸る途ながら、編笠まぶかに著流しの大小おとし差、みるから由緒ある有徳の浪人めいて兩國の橋を渡らむとすれば、誰かは知らず背後より、

「大夫、大夫」

我を知るほどの奴、原田とも呼ばず甲斐とも呼ばず、大夫々々といふは何者、いづれ藩中の士分かと編笠越に見返れば、例の兵部が腰巾着なる菅野小介なりける、

「や、小介とやら、過日、身が屋敷へ參つて何かの約束いたしたが、さても其後なんとぢや、見れば一入さらに脛腰達者の様子、はよよよよよとかく生命は惜しいものと見ゆるわ、二枚舌の奴め、途中で我を呼び止むるなどは推參至極」

「はッ、重々おそれ入ッて今更ら何とも申し上ぐべき一言もなし、さりながら其間に聊かの仔細」

「はよよよよよまだ喃き居るわ、男たるべきもの武士たるべきもの生命を的の約束に元來どれほどの大事ありとて、さるを聊かの仔細あつて止めたとは、はて秋の草葉を舐る氣樂蜻蛉、童が竊で指すぞや、立去れ、立去れ」

「途中かく御言葉返すには、憚りながら」
「えッ、くどい」

そのまゝ編笠ゆりなほして立去る甲斐の背後より、小介なほも慕ひ来て、振返れば忽ち止まつて會釋し、歩み出せば又もや慕ひ來る心中、さても何をかするためぞ、男らしくもなき執念ぶかき奴かな、きたなげに死太き奴かな、よし何處までも來よ、時に取つての幸ひ此奴このまゝ屋敷へ連れ込んで、一遊び弄んだ上、をかき節もあらば餘他ながら分家殿への壁訴訟、それよくと振返りて俄に差招けば、今更に氣味わるしとて躊躇ひもせざる不敵の小介、走り寄つて小腰を屈めぬ。

「召しまする御用は」

「はよよよ召しまする御用よりは追ひ來る御用の多からむ様子、そは兎も角も、また身が屋敷まで來て、先日の約束を仕直しては如何ぢや」

途中にて出逢うたる菅野小介、必定また戀りすまに我を附け覗うて何事か役にも立てむ男振、

兵部への手柄顔せむためなるべしと、甲斐はやくも心に一物それと悟つて、わざと我より屋敷へ伴ひ歸りつゝ、人なき奥の一室へ呼び入れて言葉しづかに問ひかけぬ、

「まづ第一に問ひたきは、先日まるつた節、何か獨り心で合點しての口上、腹切ると約束しながら今に無事の真姿は」

「はッ、たとひ御目よりは蟲に等しき草葉の奴なりとも、我は我いやしくも武士の端くれを塞ぐ菅野小介、一旦おのれが口より出でし約束を忘るゝなンド、さる卑怯の振舞は夢さら以て、なれども、あの時に御暇たまはつての歸るさ、背後より拙者奴を呼び止めしは、仔細あつて國元出奔の砌、上意討として追ッ掛け來りし者の舍弟、返り討にせられし兄が怨敵の白刃ぞと名乗り掛けられて俄の當惑、惜しからねど、こゝに生命は一つ身は二つなくて叶はぬ難儀至極の場合と相成り、今更に」

「ふむ、なるほど、それは當惑の事でがな、あらうわ」

「なれども、先約様は大かへの手前、まづ其者に委細うちあけて拙者住宅に伴ひ、こよ半月の一命しかと預り置きました」

「はよよよよ小介とやら、いつ語ッても語る毎に心さまぐと違ふ男よ、生命は一つ、身は二つ無くて叶はぬといへども、その者への義理と我への約束まことならば一度で埒の明くべき事ぢや、九寸五分を腹に押當てよ切るや否や其者に首うたすれば忽ち一舉兩得、こよ半月の後とは何の思慮あツての日延ぢや、はよよよよやはり狸め、尾が見ゆるわ」

「いや全く以て、其者が」

「その者は虚偽であるまい、汝の兄の敵と呼ぶに相違あるまいが、さて汝の心が皆うそぢやとこころで甲斐が改めて申さうわ、まづ我への約束、それは約束せられた我より解いて水に流

す間、いさぎよく其者と勝負せい、兄弟もろとも返討に致さば義に於て聊か、なれども武士の意地としては詮方もなく、かつは汝の勇氣却ッて現はるよ次第、兵部殿なほさら珍重めされて主従の喜びであらうわ、時に兵部殿さて其後の御様子、如何であるの」

「主人の義に就いては大夫こそ萬々御承知の筈、現に一昨夜の奥ふかき御容様は、大夫と聞き及び居ります」

「はよよよよよそであツた、これは甲斐が一本まるられたわ、はよよよよよなれど一昨夜以來の事を尋ぬるぢや、いまだ御髪そのまよか、たしかに圓頂黒衣になると仰せられた筈、いやこれも汝が腹切る約束と同じ事、一時の御座興であツたかも知れぬ、とかく主従は何事も似寄ッてこそ天下泰平、もし其間に相違あツては御家の大事ぢや、なう小介、兵部殿まことに御言葉通り浮世を捨てよ高野へ御入り遊ばさるよ事もあれば、その時こそ汝も腹

切るであらうわ、はよよよよ」

天下も心のまよなる大老の權威をもて頭上より難題を浴せかけられ、人は恐るよに足らねど身は正しく分家として當主の伯父なる兵部に強ねて働ねられ、しかも國元には四十八館とて世に聞えたる歴々の老輩が腕を聯ね眼を張つて嫉妬偏執のあまり我役目に越度あれかしと覘ふ折柄、まして内外公私の江戸一切をこよに引受けて公邊は固より諸侯の手前を一身に取扱ふ日夜の職務、あはれ流石の原田甲斐も思へば何とやらむ心細けの境涯なりける、されど心細けの境涯ながら生れつゝいたる膽は飽まで太き男、戰國に出逢はざる太平の世の武士が力を試すは此時なりけりと、人しれぬ燈火の下に扇子を開いて自己が片頬の笑をあふぎつよ、よしや事むづかしく落ち果てよ四面に楚歌の聲を聞くと伏して見る午王善光の一刀

これぞ今の身を守る萬夫の味方、素破といはど善惡ともに人手をかるまじき心を押据ゑて、思へばまた面白の世の中や、原田甲斐として當坐の慰みには菅野小介といふ小癩の徒者あり、むざく彼奴を弄んで機會よくば一條の導火とせむも一興、たどの浮世男としての慰みには駒形の隠宅あり、をりく通うて心を洗ひ鵬を濯ぐも身に取つての保養、これもまた思へば面白の世の中や、

夜更け人定まりて寐られぬまよの燈火に枕ながらの書見にも飽き、さりとして夜の曉くるには程もありなむ、いざとて身を起しつゝ厠へ行き、かへる廊下の縁端に手を洗ふべき雨戸の小窓おしあけて、手洗鉢の柄杓を取らむとする一刹那、横の木の根方より一條の稻妻さつと閃きぬ、

電光石火の間一髪、持てる柄杓の首は斬られて闇に飛べども、手と柄は残つて無事なる原田

甲斐、そのまゝ息を殺して内より戸際を窺へば、さても大膽なる曲物かな、南無三はツと仕損じたる驚愕に慌てゝ遁け出す音もなく、ふけたる夜は愈々閑として今しも飛んだる杓の水やかよりけむ、木の葉より滴る雫の音のみ冴えたり、

伊賀者の習慣、忍術を得たる例の男ならば、必ず家内に這入つてこそ業をすれ、さるを厠に立つやら立たぬやら夜をこめて知れ難き我を軒下の闇に待ち受けて、しかも杓の首きつたる自刃の冴えは例の男より聊か劣りし太刀風、大膽ながら此曲物いまだ若輩の血氣なりけりと、思ひしまゝに自ら飛び出でて召捕らむともせず人を呼んで騒がせむともせず、悠々として元の臥房に立歸りながら、燈火かきたて枕刀しづかに引寄せて身を横たへたる甲斐が度胸、なるほど奥州五十四郡の膽を集めし鬼神の辨之助が成人となりし男なりける、

朝とく起き出でて顔を洗ふに湯を用ふれば、首きられて人に見らるゝ時の色艶わるしと、かかる事にも平生の用意ふかき當時の習慣、それにはあらねど下郎に冷水を汲ませて寝起きの満身を拭ふは辨之助の昔より甲斐が一流、今朝は取別け東天の鴉に先だちて臥房を立出で、例の水行水も濟みての後、開け放したる縁端に蓐を敷かせて、庭の面をじつと見詰めながら何をか思案の體、

をりしも庭を掃かむとて箒を携へつゝ入り来る下郎を、甲斐しづかに招いて厠の外なる槇の木の間方を指さしながら、
「こりや、その木の下を改めて見よ、手を洗ふ毎に鉢の水おのづと流れて土の柔かき上に、もしや人の足痕など無いか」

はッと答へて下郎そのまゝ根方を見れば、果して人の蹂躪りし足痕、かくと仔細に語れば、田斐おもむろに首肯いて、

「その足痕をこばかりか、箒を止めて庭中とくと改め見よ」

またもや物を拾ふが如く庭の隈々を定めて見れば、なるほど何者か腕に飛石を傳うて庭の柴折戸を飛び越えたる風情、

「よい／＼それでよい、はよ／＼とよ／＼と前夜は鼠賊奴が來居つた様子ぢや、なれど一物も取られて僥倖、一物も得取らで氣の毒ぢや、はよ／＼とよ／＼」

そのまゝ縁端の座も動かで、暫時また思案の體、やがて運び出づる朝餐も、此處へ／＼と引寄せ、いつよりは椀の數も心地よけに重ねつゝ、また暫時そのまゝに默然たりしが、はたと小膝を打つて片頬の笑を浮べぬ、

目色を据ゑて息を含み肩を怒らせ脣端を一文字に閉ぢて的なき空を睨む時と、思はず小膝を打つて片頬に微笑を漏らしたる時とは、餘人に取つて生死の境ともいふべき大事の場合、甲斐がためには善惡ともに不敵の膽を動かし始めたる印なりける、さては動かざること山の如き不敵者が、そもや俄に何を思つて如何に振舞はむとする、手を拍つて召使の小姓を呼びつゝ、鏡に對うて髪を整へ衣服を改めて麻の上下を著し、流石に白晝の乗物は憚るべき身、ただ例の兩若黨に草履取のみを従へて、下馬先の屋敷、酒井が門に向ひぬ、

伊達陸奥守家來原田甲斐いさよか御内談申し上げ度き義あつて御當家の御家老石田彌右衛門殿に御意得たしと、酒井家の内玄關に案内を乞ひぬ、

いざ此方へと引かれて客室に入れば、飛ぶ鳥おとす大老職も内に斯人あればこそといはるよほどの石田彌右衛門、年輩五十二三の肉たく肥えたる大男、繼上下に威仁を正して出づれ

ば、甲斐ますく、慇懃に容を改めて一應の挨拶すみし後、憚りながら御内々にてといふ言葉に、主客もろとも膝を進めて給仕の若衆を遠ざけぬ、

「主人綱宗の心體でなく、たゞこの甲斐が一存にて參上の次第、つきましては貴方にも御主人の御意と遊ばされず、御一存にて御指圖のほどを願ひ上げたう」

「委細承知仕る、して御内用の儀は」

「餘の事でもなく、先達御當家より俄に甲斐を御召しの上、御前したしく御懇命を下されし儀は、手前主人の伯父に相成りまする分家の兵部は御承知の通り御當家の御縁邊に聯り彼是より内證高わづか三萬石に捨て置くは不慇懃の事ゆゑ、なんとか工夫を致して公儀に願ひ出せよ萬事は予が含み居るとの仰せ、つながらる本家の面目といひ嘿や當人も満足と存じ、有難く直ちに兵部へ御内意を洩せしところ、案外にも何とやら御意を喜ばざるの風情、果

は圓頂黒衣に身を捨て、高野に上りたきなど、勿論、一應の理解は段々と申し聞かせましたれど、さりとて家來筋の甲斐みだりに其我儘を制する力も薄く、また當館様に對しては何とも以て申譯のなき始末、殆ど途方に暮れ、推參ながら斯く内々にて貴方の御分別を伺はむがため」

「成程、それは定めて御迷惑千萬、さりながら御分家殿は如何おほしめされて左様の我儘を振舞はるゝものか、もし手前主人雅樂頭が入らざる差出口とでも思はれての御不足にや」

「いや、なか／＼以て、左様の恐れ入ったる次第ではあるまじけれど、甲斐が料簡にては、本家の石高より幾分か削り取って三萬石の上に差加へし後あらためて公然の諸侯に願ひ上けむと存ぜしを、また分家が心體にては、甥の知行の喰ひ餘りを貰うて餘生なき榮華をするならば寧ろ世を振り捨て、山に入るとの一徹短慮、いはど此邊の迷ひかと存じまする、

つきましては家來筋の甲斐一人にては何とも始末いたしがたく、憚りながら御當家の貴方より別段に」

「いや宜しう御坐る、手前また料簡の致しやう次第で」

「何分にも御工夫のほど只管」

いひつゝ額越しに見上げたる甲斐が眼中、はや一事の難題を逆さまに酒井家へ持ち込んだりけり、

原田甲斐が立歸りし其日の夜、家老の石田彌右衛門たゞ一人、雅樂頭が平生の居室に罷り出でて、丸絹燈の火影に主従が人しれぬ談合、これぞ伊達家に取つての大事、夜更け人定まつて悪魔の私語くにも似たりける、

「彌右衛門、内密とは何事ぢや」

「はッ、餘の義でも御坐りませぬ、今日伊達家の原田甲斐、拙者役所まで竊に参りて段々々のたのみ、例の兵部殿が一條で」

「むよ甲斐が來居つたか、彼奴なかくの男であらうかの」

「聞き及ぶ奥州の名物、器量と申し辯才と申し、なるほど斯人かと」

「そであらう、して兵部が一條とは」

「先達、御前ぢきくに彼を御召しの節、仰せられましたる義につき、甲斐より直ちに兵部殿へ申し聞けたるところ、案外にも兵部殿不得心の様子」

「はよよよそれは兼てより予が教へ置いたのぢや、さすがの甲斐も中間に挿まつて、

さぞや分別に」

「いや、外面にこそ難儀至極の體を粧ひ居りますれど、彼奴が内心さらに驚きも致さぬ

氣配

「ふむ、して彼奴なんと申し居るな」

「甲斐が申しまするには、一の關の三萬石に本家の幾分を割いて増し加へたる上、改めて天下の諸侯並に願ひ上げむと存せしところ、分家こと案外の顔色にて、甥の喰ひ餘りに餘命わづかの榮華を求めむよりは圓頂黒衣に身を脱れむものとの一徹短慮、いかど工夫いたして宜しきやらむと、甲斐奴たゞ萬事この彌右衛門に凭れかよりし口上」

「や、南無三、兵部の不覺人が、また彼奴に逆吊せられ居つたわ、たゞ飽くまで拗ねて困らせよと申し付けたるに、甥の喰ひ餘りなどに入らざる無用の口を迂らせし故、直ちに言葉質を取られたのぢや、つまりは本家の知行を粟粒一つも減らさず肝煎の予に取持たせて公儀より加増させむといふ甲斐めが策略、逆もく兵部一人では取のなるまじき剛敵ぢや、な

れど予が一旦かく打ち出したる上は、此まよ彼奴の逆吊に逢うて止まむこと無念千萬、彌右衛門、何とか工夫せい」

「はッ」

「生けて予が念に随ひ兼ての義に使はずんば、えよ殺す分ぢや、彼奴とて鐵の身であるまい」

「はッ、恐れながら其義は、あまりの御性急、しばらくの間この彌右衛門に」

「むよ其方に任すぞ、なれども、寸分の油斷もなるまじき奴、惜みすぎて深水に落つるな、

結句あれほどの奴あればこそ萬事かく手間取るのぢや」

「はッ、その邊も彌右衛門が委細拜承、さのみ見苦しうは取組みませぬ覺悟」

「むよ、いさぎよい、其方なれば彼奴の好い敵手ぢや、餘所ながら見物するぞ」

「はッ」

原田甲斐が逆吊に押し寄せ來りし言葉の端々、心中それと察して其夜たどちに雅樂頭へ委細を談すれば、本人の兵部は逆も叶はぬこと彼奴ほどの男に取組まむものは石田彌右衛門、其方こちら面白けれ、ぬかるな、やらるゝな、動きの取れざる急所を叩いて本音を吐かせし上、かつて予が腹藏の次第をうちあけ、もし聞かすんば惜しけれど無い者にせよと、主命ごとくに深く疊みし彌右衛門が一心、おのれやれ、甲斐いかほどの奴なればとて、

この石田彌右衛門は雅樂頭と乳兄弟にて、幼少の頃より文武の名を得たる酒井家の秘藏ながら、同じ家老の列席にも故あつて態と公然には立現はれず、常に奥まりたる主が居室の左右にのみ随ひつゝ、當時天下も心のまよなる下馬將軍の振舞は全く此彌右衛門が方寸より流れ出づるほどの男、されば世上なみくの君臣と事かはりて、善にもあれ惡にもあれ、主従

れ一體、もしや雅樂頭の命數かぎりあるの曉は忽ち禁制の追腹すべきもの、たしかにこの石田彌右衛門なりける、

されば主が心の一物に味方として面白く敵として憎からむ原田甲斐は、正しく彌右衛門がために味方として無二の友なるべく敵としては其まゝ無事に置くまじき一念、匣にかけたる兵部の如きは固より眼中になし、それに就いての手段さまざま工夫いろく、人しれず扇子をもて自己が膝上に描ける策略、そもや伊達家の名物を擔にするの力あるべきや、表面は天下の大老と日本三大名の其一と四海に轟きわたりし鬼政宗か一子兵部との三巴、されど事實の力競へは石田彌右衛門と原田甲斐、弓矢八幡いづれに宿り給ふやらむ、

ともかくも甲斐ほどの男を取つて押へむには、なまなか本人の兵部に不覺の小働きさせむよりは、思ひもがけぬ天より大石の落ち來るが如き勢ひをもて、さすがの膽魂きよつとする際

間に附け込み、稻妻の光輝さつと射て瞬く間に眞正面より引ッ掻きくれむと、世には酒井流と唄へど其實は石田が手段、例の早業を思ひ立ちける、

原田甲斐また例の駒形通ひ、編笠ふかく面を包んで草履取ばかりを召連れたるまよ、途すがらの浮世さまぐ眼前に見るも一興、兩國の百本杭にさしかよるころ、これは桓武天皇の皇胤平の經盛が幽霊なりと、聲を含んで中音に唄ふ謠の節かすかに聞えぬ、

何者ぞと見れば、河岸端に一枚の破薦を敷いて臘富士といへる編笠の煤けたるを打被りつよ、幾春秋の年を経し絲の亂れの苦しさは腰に纏ふ帯の破綻のみかは、世に唄はるよ紙衣の袖も戀の果ならねばや見苦しげに垢づきて、かくまで尾羽うち枯らしたる浪人體の男、柄絲は解けて鞘塗は剥けたれど流石に昔わすれぬ一刀、さても如何なる人の身の果なりけむ、野末の犬

さへ飢ゑて死せざる今この太平の世に、しかも月は軒より軒に入る百萬の大江戸に住みながら、あはれこれほどの骨格を往來の一文二文に露命を繋ぐとは、

謠の節の細かに寂びて韻を含めるさへ由緒ありげに、固より好める道とて耳軟つる甲斐、しづかに立寄つて懐中の幾何か白紙に捻りつよ、下郎に渡せば下郎さし寄つて小腰を屈めながら、「手前主人より下さるよ」

裸の鑊錢おきならべたる上に載するが如く差置きぬ、

浪人しづかに膝を改めて、破扇持てる片手を膝上に片手を地につきながら、

「いづれの御大身かは存せねど、有難きまで忝き御芳志、編笠ぬいで御禮申し上ぐべき筈ながら、かくなりし尾籠の體、結句このまよ御免なりませ」

いふ言の葉草にも露は宿れり、

甲斐なほも編笠越に浪人の體つらく見入りて、幸ひ四邊に人もなければ、

「異なる事を承はるが、此方じたい何處の産ご、また今は、いづれに住居せらるよ、あまり諺の節が面白く大道の聲には惜しいばかりに尋ぬるぢや」

「はッ、生甲斐もない露命の種を御賞美下さるよ段、却ッて恥かしく存じまする、拙者義、産れは西國、この江戸に罷り越してより一年あまり、御覽せらるよ體に御坐れば定まりし住所とてなく、たゞ其日々々の風次第に散り行く先を我宿と致して」

「やれ笑止のこと、それほどの義なれば固より獨身でがな」

「御意に御坐りまする、獨身なればこそ斯くても惜しき生命、もし妻子でも御坐れば結句それ引かれて人並の世渡りも易かるべき身と、我ながら」

なみくの世と變りて一癖ある言葉に甲斐をどる哀れを催しけむ、

「其日々々の風次第といはるよが、明日まで此まよ此處に出て居られよ、また歸途に立寄つて心ばかりの施主になり申さうわ」

兩國の百本杭に破薦一枚を敷いて扇拍子に小諺うたふ袖乞の浪人、其日々々の風次第いづこを宿と定めぬものながら、昨日の甲斐が一言、明日また通らむ時こよに待ち受け居よとの言葉に縋りてや、今日も朝より煤けたる臙富士の編笠ふかく、曉天の露にや濡れけむ身に纏ふ紙衣も濕り勝に、心も聲も沈み果てたる中音を含んで唄ふ折しも、御藏橋の方より二人の武士が來かよる足を踏み止めて、腰巾著の鳥目さぐり出しつゝ薦の上に抛け與へぬ、

「それ呉れるぞ、ついては通ひ小町の一段を聲はりあけて聞かせい」
浪人は編笠越に見上げて會釋しながら、

「御芳志かたじけなう御坐れど、御覽する通り草を敷寝の夢さへ叶はぬ素浪人、通ひ小町の一段などと物の御所望にあづかつては甚だ迷惑いたしまする、たゞ臙けに聞き覺えたる昔の餘技を、餘儀なき露命の烏目に對して冥加のため」

「むよ、さらば其方の口に馴れたる一節、何にてもよい、語ッて聞かせい」

「憚りながら斯く面體を包みまするもの、腹からの袖をでもあるまいとの御賢察を蒙ッて、あはれ何卒このまよ」

「異な事をいふ奴ぢやわ、唄うて後に貰ふべき筈の烏目を唄はぬ先に呉れるは一倍の慈悲、さるを我等が所望、しらぬ小町を止めて唯おのれが口に馴れたる一節それさへ唄はぬとは」
「さらくゝ以て、左様の次第では御坐りませぬ、かくまで尾羽うち枯らせし者あはれと思召されて、烏目下さるゝ御人品に對しては、あらためての一節なんとやらむ却ッて恥かしく

恐れ入る心地、この廣き天地に身一つを養ひかねたる奴が悲鳴に等しい呻り聲と、たゞ御聞き流し遊ばされて」

「や此奴め、身の分際も辨へて小癩に觸る段々、さらばよいわ、今くれた烏目とりかへして、この大川に抛け込む音でも聞かうか」

「思召に叶はずば如何やうとも御勝手次第、はよよよと袖をこそ致せ袖すがりは致さぬ者、御意に反いた烏目はおろか、小判かさねて賜はるとも受け申さぬわ、たゞの非人同然と思召して大切の御身に悔いて返らぬ不覺を取らぬうち、片時も早く御通路あれ」

「や、此奴、此奴、刀の汚れを恐れて手を引く我等でないぞ、幸ひ近ごろ求めた新刀の切味、おのれ兩斷となつても後悔なきか」

「御念に及ばず、固より生甲斐もない腐れ男の捨場に困り居ります拙者、されどお手前様

の三人五人がためには聊か惜しき心地も致しまするぢや、たえて久しき腕立ながら、いざ御敵手いたさうか

言葉もろとも屈めし五體すつと起てば六尺にも近からむ大男、臙富士の端を取つて現はれ出でたる半面の虎髯、眼は曇り勝なる曉の明星に似たり、

献上鯛一尾が百兩の價値に飛ぶかと思へば大切の人の生命が三文の意氣地で空となる世の中に、兩刀さし反らして肩を怒らす武士にも魂魄脱殻の五體あり、往來の袖にすがりて露命を繋ぐ身にも叩けば怖ろしの音ぞする當時の危さ、狼狽へた氏神様も御存じのなき珍事はありけり、

されば今こゝに尾羽うち枯らしたる小諺の素浪人も、堪忍袋やぶれて這ひ出し蟲の居處や悪しかりけむ、すつと立ちて世をも人も忍びし編笠ぬいだる勢ひに、二人あはして四本の人斬

庖丁は腰間にありながらも、最初の權柄どこへやら案に相違の氣勢に打たれて、南無三寶、うかく口がこつて油斷大敵、よしや勝つても手柄にならぬ損な敵手を引受けたりと、今更ら遁けも出されず打とも得やらず、たどぎろく目ばかり光る二人の立往生、下手な細工に

出来たる饑饉年の達磨に似たり、あはれ仲裁人の天より降れよかし地より湧けよかし、

「固より路頭の袖乞で御坐れば一文二文の慈悲に膝を疊んで頭を下ぐれど、嘲弄されては梵天さらに堪忍ならぬ者で御坐る、いざ御所望の通ひ小町よりは生命がけの喧嘩ぞ得たる男、いづれよりなりと打ち込んでお來やれ、なるほど御合點まるまでは御敵手いたさうわ、

はよよと諸も御損な敵に出逢うて笑止千萬」

いひつゝ左右を睨み分けたる面魂、眞向額の毛際より左の眉を縫うて受けたる太刀疵の痕いよく氣味わるし、

兩刀の手前、心に弓矢八幡を念じて絶體絶命、あはや抜かむとする折しも、一人の下郎飛び込み來つて聲をあけつゝ中間に立塞がりぬ、

「手前主人たゞいま仲裁に立入りまする、暫く、暫く」

やれ嬉しやと二人の木像こゝに始めて生き返りし心地、素浪人も見れば昨日の慈悲をうけし人の下郎なり、雙方たがひに睨み合ふばかりの中へ、悠々として立寄りしは原田甲斐、編笠の端に手をかけて先づ二人に會釋しながら、

「何事かは存せねど此場は此まよ、はて御兩人も主持なれば猶更ら、よしや御浪人にもせい、あたら生命で御坐らう、またこれなる人も堪忍めされい、骨格人品に不似合の袖乞せらるるには定めて深き仔細あるべく、その包める仔細こゝで打明けでは叶はぬ事となつても氣の毒の至極、喃そでないか、はよとよと雙方ともに名乗らず、仲裁の我も名乗らず、ただ空ふく風にまかせて此まよ〜」

汐留の仙臺屋敷へ原田甲斐の私宅と尋ね來よ、さりとは袖乞に惜しき骨格、あたら男一人を拾ひ得させむと、残せし言の葉に縋りて例の素浪人、其日の夕暮おとづれ行きぬ、奥ふかき一室に呼び入れて、甲斐みづから煎茶を差出しつゝ、四邊を遠ざけての聲低う、

「小唄にも諺ふ通りぢや、水の流れと人の行末、そも如何なる仔細あつて今の身となられし、かまひなくば包まず語つて聞かされい、不肖ながら斯く大家をあづかる身、なつて善くば力にもなり申さうわ」

「はッ、おもひもよらぬ御懇の仰せ、もと拙者めは西國の産れ、仔細あつて十七の歳この江戸へ罷り越し、二十三の曉より麻布の奥に町道場を構へ、未熟ながら聊か習ひ覺えたる劍道

師範に暮し居りましたところ、御大老の酒井家に召出され、藩中の少年に稽古させよとの御意ありがたく、御合力米三百俵をいたゞき、八年間まづ無事に相勤め居りました折柄、御出頭の石田殿が手より吉川傳内と申す人が俄の御抱へと相成り、これまた劍道師範、おなじ三百俵ながら譜代でもなければ腕一本の仕官ごよに席の前後を定むるため、御前仕合せよとの嚴命」

「なるほど、して勝負いかゞであつたな」

「歴々御大身の前で自己が身の事を斯く申し上げては、何とも以て憚り多き次第ながら、同じ知行と同じ役とで席順を定むるならば、古參新參とすべきが世上の習慣、さるを腕一本の仕官とて試しての上とあらば、弓矢八幡、千石二千石にても嫌と申すべき男が、價値相應に打ッて出でたる三百俵取、しかも出頭の石田殿が肝煎代を差引いては百俵に足らぬ敵、

吹き飛ばさむも易けれど、せめては三四合うち合させての後と、慈悲の木刀あはれ何とかしけむ傳内の眞向われて其場に氣絶、數日の後に相果して段々、今更ら氣の毒に存じても叶はぬことと唱名念佛いたせしが却ッて物の一倍に石田殿が憤怒を増し、忽ち御暇となッて國元に遁け歸るべき筈を、拙者め引續いて町住居いたせしが猶更ら憎しとて、度々の刺客、それも四五度は追ひ遁したる最後の仕手、此奴なかくの死太さが其身の不幸、また拙者めの白刃にかよッて」

「むよそこで後の義は」

「もはや太刀打では届かぬ者と見られてや、御大老の職權を借ッて拙者めを召捕らむ様子、さればとて生命むざぐゝ冤罪に落されて獄卒の手に死せむこと無念心外」

「それがため世を忍ぶ今の身といはるゝか」

「草を分け石を轉しても穿鑿すべき下馬將軍の猛勢、なまなか奔ッて道中で捕はれ街道で打たれむよりは、同じ御膝下の江戸に暫しの面を包んで、もし露現の曉は太平の夢おどろかすほどの斬死いたして、萬人の目を驚かさむ事せめてもの本望」

「むよ天晴の武士氣質ぢや、して此方の姓名は」

「肥後熊本の産、氏家平六と申しまする」

なるほど、下馬將軍と聞えたる今あの猛勢もて睨まれたらば、あらためて諸家への奉公仕官は固より叶はぬこと、たとひ地を潜り空を飛ぶとも所詮は遁れぬ運命を、しばしの編笠に包んで浮世を忍びつよ、いざや露現の曉を待つまでもなく、機よくば此方より現はれて花の江戸中に唄はるよほどの斬死、せめてこれが斯くなりし身の本懐とは、天晴の度胸、おもしろき性根、その度胸と性根とを見込んで原田甲斐こよに後見するからは、たとひ大老の權威と

て出頭の石田が活動とて、やはか袋の物を探るが如くにはさせまじ、ついでには此屋敷は萬事に故障あり、幸ひ駒形の我隠宅へ連れ行かむとて汐留より舟漕ぎ出させて、互に膝鼓うちながら諸の節こまかに大川を流しぬ、

やがて隠宅の裏河岸に舟さしよせて、甲斐みづから立出でつよ手を鳴らせば、をりしも中庭の草花を摘まばやと、裾をかよけて松の根方に無心の露、此ほどは打ち絶えて來まさぬ胸の恨みも忘れ果てよ、おもはず笑を含みながら棧橋へ出で迎へぬ、

「こりや露、今日はの、容を連れてまるツた、やれ危し、氣をつけよ、棧橋の水垢に這るぞ、心なし女が」

原田甲斐も麻の上下を脱いだる浮世男、こよに生命はありけり、水に臨める例の一室に、甲斐が床柱を背にして坐せば、きのふ袖乞の素浪人けふは素性の知

れたる氏家平六、容を改めて一入さらに慇懃の體、露がたてよ差出す抹茶も久しぶりの枯れたる腸に染み込みけむ、おもはず舌を鳴らして御風味々々と感ずる風情を、甲斐そのまま指さして、

「こりや露、この人はの、さる仔細あつて今日より此家の留守居を頼んだちや、天晴の手きき魂きよ、いつも和女が怖るよ夜盜の憂患もないわ、はよよよよ今夜から枕たかう嘸や寐過ぎることてがな、萬事に心安う致せ、よいか」
いひつよ平六を見返りて、

「これは我等が保養の世話をいたさする女、たど小兒に等しい無邪氣の性質、何事も心おきなう、娘一人を持つたと思はれて」
兎も角も酒にせよとて、露を彼方へ追ひ遣りし後、甲斐しづかに膝を進めて平六に對ひつよ、

「いはるよ通りの次第なれば、いづれ酒井家へは包み終せぬこと、さらば我より出頭の石田へ委細うちあけて此方の一身を貰ひ受けむ、もし拒んで許さじとあらば其時こそ却つて面白し、太平の世に生れ逢うたる原田甲斐が一活動ちや、はよよよよ世は人の業、人は魂魄のこと、何の會釋かあるべき、その石田のみならば敵手に取つて聊か喰ひ足らねど、下馬將軍の酒井家といふだけが花ぢやわ」

「はッ、いかなる僥倖の御縁でがな、路頭に仆れて果つべき身が斯くまでの御懇命を辱うし、武士冥利、弓矢八幡の加護とも心得て、しかと心根に徹しまする段々、何分とも萬事よしなに」

「心丈夫に居られい、九州原田の嫡々ぢや、おのれが吐いた舌を忘るよ男でないわさ、はよよよ蓋を傾けて談ずるとは斯くの場合であらうよ」

仔細ありとはいへ、昨日まで兩國の河岸端に破薦一枚を敷いて心ならぬ露の節に露命を繋ぎし素浪人、あはれ尾羽うち枯らせし今の身を訪ふものは百本杭に打寄する上汐の音のみなりしが、おもはず原田甲斐に拾はれて包みし氏素性を打明せば、あたら男おもしろき性根とまで買はれし上、今日は駒形の隠宅に名ばかりの留守居役、しかも事むづかしからむ曉は天晴れ武士の手本に残るほどの後見して死花を咲かせむとの恩義かすく、されば氏家平六ここに鬼のやうなる兩眼に涙ふくんで甲斐が身の影を伏し拜みぬ、
家守の老爺が陰陽なき正直一途に、娘の露が生命の君より御口添ありし御客とて飽まで優しき待遇ぶり、この外には走り使ひの小奴と物など洗ふ婆とのみ、固より景色は市中の仙境ともいふべき閑靜にして、萬事に心置きなき氏家平六、たゞ用もなき身を徒らに過さむは勿體

なし、きのふ思へば今日ぞ實に極樂淨土と、箒とつて庭を掃き草を振りつよ、をりく小聲に唄ふ露の節も露命の種よりは一入こまかに聞えぬ、

一夜、主人の甲斐が居室をあづかる露に頼みて、ものよ本を一二冊かりうけながら、燈火の下に餘念なき折しも、廚の方より家守の老爺も徒然のまゝ出で來りて、ふしぎの御縁といふを言葉の幕に引開けつよ、四方山の浮世がたりに時刻をうつせしが、お國元はと問はれて肥後の熊本さる仔細あつて十七の歳この江戸に出で二十三より麻布の奥に町道場、今は平六と名乗れど其ころの名は氏家三九郎、もはや四十二の半白、今年で世にいふ厄落しちやと何心なく笑ふ顔を、老爺じつと見詰めて思はず膝を進めぬ、

「肥後の熊本で氏家、今年が四十二、今より十九の昔が二十三、そも二十三のいつごろ、その道場とやらを、またその以前いづこに何を遊ばして世渡りの業に」

「はて異なる事を聞かるとわ、さればよ、二十三の春四月、さる人の世話で劍道指南の看板あけたが、まづそれまでは住所も定めぬ血氣の浪々」

「して従來、奥様を御持ち遊ばした事は」

「獨身、生れて以來四十二の今日まで、定まった妻といふものは」

「もし定まらぬ妻めいた女中は」

「これ老人、赦してほしいわ、我とても男の生涯ちやもの、若氣の頃の白痴談を語れば、一

つ二つ何とやら、あるやうにも覺ゆるなれど」

いひつゝ自己が額を叩いて聲たかく笑へど、老爺いよく膝を進めて眉を寄せつゝ、

「もし、もしや御心に覺えなくば御免なませ、もしや此方様、十九年以前さる女に生ませ

た兒をお捨てなされたことは」

「や、そとそれを何として老人」

「たしかに覺えの御坐らう筈」

「や、や」

つゞく言葉もなくして俄に驚く顔色を見るや否、老爺うろたへて走せ出せしほどもなく、娘の露が手を取つて引き摺り入れぬ、

「氏家様、これ氏家様、この、この露は此方に捨てられた子ぢや」

「えッ」

浪人なれば朝夕勤仕の主もなく、獨身なれば意見の親なく養ふべき妻子なく、西國の端より江戸の真中へ飛び出したる身の一本立、いざといはど頼む兩刀の外には友朋輩の扶助もなき

かはりに氣兼の義理も絲瓜もなく、一年酒食の料はあり、とる年は今を血氣の二十一の曉、ただ浮世を花は櫻ぞ人は武士と振舞ひつと、淺草の片邊りに母娘たど二人が世帯道具の小物を商ふ家の一室を借りて、仕官の途も求めず奉公の口もたづねず男一貫ふらりと暮す其うちに其娘が十八の春、あはれ縁でがな、人しれぬ契りの情いつしか色に現はれて、有徳の町人でもあることか素性も得知れぬ浪人と、母なるもの恨み怒りし頃は南無三寶、はや身も重く六月の末なんと詮方も盡き果てと、互に若氣の誤り外に工夫もあるべきを、手に手を取って家を遁け出し、品川の片陰に暫し世を忍んでの佗住居、生み落したるは女の兒、その喜悅に引替へて産後の苦惱に二月の後、其みどり子を殘して逝きし涙の乾く間もなく、さらぬも世事に慣れざる血氣の武士が懷中に抱へての貰ひ乳、何として行末の甲斐ぞあるべき、かさねぐの憂を積らす業ながら、路頭に捨てよあかの他人の手に拾はれむよりはと、委細の詮證文に小判五

十枚を添へて、淺草の祖母にあたる軒に捨て置きしは、涙なりけり十九年の昔、さても其後さるほどに浮世さんぐ我も志を改めて、二十三の秋やうく麻布の奥に町道場を構へ、あはれ彼女あらばと歎けども今は還らぬ涙、せめて我子を育てむと人して尋ねれば家は其まゝありながら行方しわすのよし、春の花さては秋の月、そよと風さそふ曉の寢覺めにも夜更け人定まりし夜半の枕にも、ゆめ忘るべきやは鬢に霜降るこの年齢まで、いづこの里に何として、いかなる人の手に育ちけむと、思ひつゞけし我女の末が思ひきや花の姿の今こゝにあらむとは、しかも十九年の後めぐりて斯くまで奇しき逢ふ瀬のあらむとは、神の業か佛の加護か、父ながら父甲斐もなき我、子ながらも子でなき人の娘また恩人の寵、たゞ氏家平六とて新たに此家の留守居となつたる男の髻面、露どのとやら近う寄つて穴のあくまで御覽なりませ、お泣きなさるゝは不吉々々、や、さても争はれぬ血筋の種ちや、すぎし女に其まよ、

よくも肖たりけり、あゝ肖たりく、今は現在の父とせらるゝ老人も座あれば、さのみの俤りもあるまじ、恩人の寵ながら、いざ差寄つて、この平六に其手を握らせて下され、野犬の腹も肥さで無事に大きくなり居つたわ、年は十九の花、持病もないか、蟲氣も持たで育ちしか、さるにても原田殿の寵をうけし今の身は、この平六に何とせよとの佛神が呵責ぞ、南無三寶、

不思議といへば怪しきほどの不思議、おもひきや昨日までも今日までも世にあるかぎり一人の父と思ひし其人は父ならで、君が情に拾ひ上げられ此家の留守居に置かれし其人がまことに我身を生みの父ならむとは、

さるにても今の今まで我身の素性を夢うつよにも知らせ給はず、現在うみの子として朝夕かくも育て給ひし海山の恩義おもへば、よしや愛著の絆に縛られて流石に實父と戀しく懐かしく、かつは産後の難悩に失せ給ひし母の事など、こまかくと取付いて聞きたけれども、浮世はこゝに他人の氏家平六といふ人、

されどまた思へば、浮世は他人ながら、血筋の縁は正しく實の父子、その父と子が二人もろとも十九年の春秋を今こゝに、めぐりくつて同じ君が袖の下、これも不思議の上の不思議、かさねて深き恩の上の恩、

家守の老爺わざと其夜は何方へか行きて、夜ふくるまで歸らねば残る平六と露の二人、互に胸は飛び立つ思ひ、抱いて見たさ抱かれたさは山々ながら、さてぞ世の義理に涙ばかりを千萬無量の物語、

「なう、さまざまと今いうた理解の通りぢや、よし心に何と思ふとも、この平六を夢にも父と思ふなよ、父は唯あの老人ひとり、また父とは更に以て名乗れぬ身、わけて甲斐殿には

寢覺め勝の陸言にも無用々々」

しみぐ手を取って語れば、手を取られながらの露は袖に顔、

「何事も返らぬ事ながら、たゞく、お聞き申したいは、妾を生んだ」

「母の事が、ききたいは道理、いひたき事もあれど、はてさて委しう聞かぬが宜い、顔が見

たくば、みづから鏡にうつして逢へよ、年も年なり同じ十九の花、宵たとは諺、まこと

其まよぢや、眉毛の邊り、目といひ口元といひ言葉の端まで、ついで始めて此家で汝を

見し時、はつと思はず我心に人しれぬ涙の種」

「それほどに、よう似まして御坐つたと、聞けば聞くほど」

「それ、その富士額に前髪の亂れかよる風情、や、許してくれよ、かはいの女」

大宮人の目には物めづらしき柴の垣根に纏ふ夕顔の宿、その君のありし面影を今ことに慕う
ての風流ならねど、浮世の六分は儀式作法に縛られ人の活動も半は五月人形の粧飾めいたる
當世に、まこと武夫が腸を洗うて人しれぬ笑を浮べむ水いづこの里に流るべきや、たゞ太
古の民に等しき白髪の正直老爺と小兒に似たる無邪氣の色香を愛でて、汐留の屋敷より駒形
への通路は、此ごろ一入しけく成り行きつよ、今日も例の編笠まぶかに原田甲斐ふらりと入
り來りぬ、

路地口より下郎まづ走せ入つて通ずれば、迎へ出づる平六に會釋の笑を呉れ、編笠ぬいで老爺
に渡しつよ、差寄つて裾邊を拂ふ露が手先、よいくそれで宜いと言葉やさしう、二階の一
室に打通りながら廂簾ごしに川の面を見渡して、骨身も弛むが如き心地ぢや、同じ景色も見
る毎に新なる思ひ、あよすまじきものは奉公の身、

身を浴みして衣服を著替へ、髪を櫛り口を嗽ぎ、たれ憚らぬ尋常の浮世男となつて、おもふまよに手足を伸しつゝ、世にあるかぎりの生命を我に託しけむ笑へば喜び怒れば泣く風情さながら曇りなき明鏡に似たる露を呼んで、肱を枕に寝ながらの物語たわいなき有様は、奥州五十四郡を片手に握つて猶どこやらに物足らぬ氣色、しかも太平の世を恨み顔なる男とは夢にも見えざりける、

其日も夜に入りて後、夕餐の用意せむとて露が立去りしあとへ、氏家平六おそれながらと進み入りぬ、その面體きのふに變りて何とやらむ心に憂ひを含む體、曉の明星に似たらむ兩眼の光り曇り勝に、墨もて隈どる如き男髯も毛色さめて五體の活動しをくとせる風情を、甲斐はやくも見て取つて床柱に凭せし背を放しながら、
「氣分でも勝れぬ故か、顔色の悪さ、何とせし」

「はッ、別段これとて身に病氣のなきやうに御坐れど、昨夜以來しきりの頭痛」

「むと養生が専一ぢや、醫藥を呼んで心ながう」

「有難の御意、あはれ何をもて此御恩を」

いひつゝ言葉を止めて差俯きしまよ、思はず膝に落せし涙一滴、

「や、何がために泣くぞ、今落ちた武者雫」

問はれて平六が振り仰いだる兩眼めちやくくの男泣き、

「今は何をか包み申さうや、この氏家平六は全くの袖乞でも御坐らぬ、また拾はれし一時の御恩に感じて行末の御奉公に立つべき身でも御坐らぬ、酒井家しかく出頭の石田殿しかじかと申せしは皆これ虚偽の方便、まことは恐れながら原田殿、御身を謀る仔細あつて事もし叶はずば刺し違へむために入り込んだる曲物」

佛壇より鬼が飛び出すほどの言葉ながら、古今不敵の甲斐たど片頬に笑を含めるのみ、

「その曲者奴が、また何の仔細あつての懺悔ぞ、はよよよよ子として親を殺し妻として良人を忤すものさへある世の中ぢやもの、氏素性は斯々と語れど元來が川岸の薦一枚より拾ひ上げたる大男しかもその面魂、今きけばとて、さのみの驚愕でもないわさ、兎も角も曲者となつて入り込んだる仔細を語るとならば語れよ、語らば其まよいつまでも此家に置かう分ぢや、はよよよよ」と

夕餐の用意とり急いで廚の方に立去りし露が、わけて今日は君の顔色さへ心地よけの體に酒ひとつ參らせむと、走り使ひの小奴に物いひつくる折しも、空耳の何をか聞き違へけむ、我身を呼ばれしと思ひ誤りつよ、いそぐ手を止めて二階に上りゆけば、一室のうちに君が聲また平六の聲、互に餘念なき物語りの漏るよは、もしや我身の上かと襖越しに身を潜め

て小耳を立てぬ、たとひ現はれたればとて生涯を頼み參らする君なり、また昨日今日ながら正しく生みの父なり、さのみ罪にはあるまじ叱られもすまじとて、

それとは知らず一室のうちには、喜怒哀樂ともに例の甲斐が悠々寛々として空ふく風とも思はざる體、されど唯こよに平六は我から身を責めて苦しの大意に額の膏汗たらしく、草叢より這ひ出でて軒の蚊柱を覗ふ藁の如し、

「兩國百本杭に破薦一枚を敷いて袖乞となりしも、全くは駒形への御通路を知つての業、萬々かねてより巧みし業、拾はれし一旦の新恩は取も直さず御油斷を謀るため、かたぐい以て深く御意に入つたる上、さる人より頼まれし一大事を首尾よく仕遂ぐれば宜し、もし仕損ずれば恐れながら、それも尋常の太刀打では逆も叶はぬ義と心得、たど近く御膝下に身を抛け入れ引ッ組んで刺し違へむのみの覺悟」

「むよなるほど、して汝が其れほどまでに思ひきつたる一大事の、いまだ顔色にも現はれぬに、はや斯く俄の懺悔は何としての仔細ぞ」

「その仔細ごとにて申し上げむこと、なか／＼に却つて恐れあり、たゞ鼠賊奸卒に等しき曲物奴が、ふとせし事より自己みづから心の阿責に遁るゝ道なく、迷ひの果の一命なけ出して御成敗を乞ひ奉りしとのみ」

「さらば、この甲斐を謀つて斯くせよ、事ならずば刺し違へよと頼みし人の名も明すまいの」
「たとひ打明けて申さずとも、御心の中には既に其人と知ろしめす筈、たゞ頼まれし平六が口よりは流石に」

「むよそれも宜いわ、して此後なんと致すな、去つて其人の許へ返るか、悔いて甲斐が手許に止まるか」

「はッ、進退こゝに谷るとは實に平六が今の一身、詮なくば故郷の肥後に立歸り、浮世も武士も跡しら雲の山ふかく逃げ入らむかと」

「はよよよよとさても正直一片、もろい奴かな、これほどの義で進退谷つて山に遁け入らむとは、面魂にも不似合千萬、はよよよよ」

襖しに立聞く露は顔色さつと青ざめて、目には涙の雨や小雨、手足の震ひ胸をどらせての果は、我を忘るゝ泣聲わつと立てぬ、

我を忘れての露が泣聲わつと襖越しに聞えしかば、甲斐も平六も互に言葉の腰を折られて暫しの無言、されど坐を憚りてや我身を恥ぢてや涙もろとも伏轉びて入りも來ず、しをくといじらしの袖かみしめて厨の方へ立去りし風情に、甲斐が一入さらに不審の眉を擧むれば、平六も今は何をか包まむ、まこと父子の奇遇を祕せしは全く彼が行末のためぞと、つぶさに

仔細うちあけし時には、曲者と名乗って刺し違へむとまで白状せしよりも却って驚ける體、それより露は俄に心地わるしと夜具ひき被いて一室に閉ち籠れば、平六も自己が一室の柱に身を凭せて禪僧の結伽趺坐せるが如く、たゞ家守の老爺が持ち運ぶ膳に對うて甲斐は箸とりながら、こよにまた仔細を聞いて首肯きぬ、

露が俄に心よからぬよし、それ醫薬を呼ぶまでもない、我みづから療治して得させむと、甲斐が言葉に勵まされて、やうく力なけに出で來りし風情、おのが名の露と答へて消えも入りたきほどに恥ぢらひつゝ、顔の色も褪め目睫も重けに鬢の毛さへ亂れ勝なる哀れの姿を、甲斐わざと起つて衝立に頬杖つきながらの言葉やさしう、笑を含んで見る目も輕う、

「露、如何いたしたの」
問はれて首垂れつゝ、はいといふも口の中なり、

「氣分わるくば心して保養せよ、はて入らざる事に、くよくよ思ひ沈んで煩ふな、あはれ縁ぢや、父は鬼にもせい佛にもせい、たとひ誰が子ども今は原田甲斐が籠、はよよよともしや和女が我を嫌うて遁け出さうと致しても、八幡梵天かくなつては所詮のこと、やるまいぞく」

「その、その御言葉が、生命の綱と身にしみく、あり、有難う心得まする」

「よいくそれで宜いわ、さ起て、氣を取直して例の雀に餌でも遣れよ、あの雀も、どこの親雀が産み居つたやら知らぬが、こよの籠に飼はれては可愛の奴ぢや、はよよよと此頃は和女の顔を見覺えて段々と馴れもしつらう、はやく慰めてやれ」

すてし生命を拾ひし如く、いきくと俄に喜び勇んで立去る後姿を、甲斐じつと見送りて中音の聲を含みながら、

「花の露、花の露、そよと吹きくる風に誘はれて、誘はれて、あはれや宿りかねたる秋の夕萩、秋の夕萩」

唄ひながら何心なく廊下に立出づれば、氏家平六、はつと戸口に伏して男泣きの両手を合はしぬ、

「や、そこに居つたか南無三寶、あたら武夫の弱いところを聞かれたわ、はよよよ」と

氏家平六が怪しきまで不思議の縁の我子に逢うて、鬼さへ角を擗るてふ愛著の涙に我みづから我を責められつと、一命なけ出して入り込みし仔細かくと告ぐれど、甲斐さらに平然として顔色にも喜怒を現はさず、たゞ露か胸おどろかして泣き入る哀れを慰めながら、家守の老爺にも平生より一入の優しき言葉をくれて、例の編笠まぶかに下郎のみ引連れたるまよ、い

ざやまた浮世の塵埃を浴びるぢやと、ぶらり立出でて屋敷へ歸り行きぬ、

いつになく今日は厩河岸の渡舟を捨て、並木通りを浅草見附に出で、兩國の袂を斜めに横切らむとする折しも、柳原の方より馬上の武士一騎、物数寄の野羽織袴に細葦の一文字笠を戴いて身も輕けに紋所うつつたる鞍坪を占めつと轡に白泡かませたる體、自慢の一粒選とも見ゆる伊達の馬奴が大汗の脛は塗れて馬柄杓の濡れたる體など、さては休日きゅうじつの遠乗とんじやういづこの何者ぞ心憎き出立と見上ぐれば、思ひきや酒井家の出頭かの石田彌右衛門なりける、

我から身も名も包んで忍びの通路なれど、何をか思ひけむ甲斐わざと俄に聲をかけて、
「それへ打たるよは石田殿で在さぬか、石田殿、汐留屋敷の原田で御坐る、甲斐で御坐る、や、そのまよく平に其まよ、手前も御免を蒙つて笠越し、さて今日の寛體くわんたいいづれへの御馬上ぞ、何とやら御羨しう存する」

主従ふかく心を合せて例のこと曲り出せしより、今日は訪ひ來るべきか明日こそ來らむかと、まちに待ち受けしに其後なんの音沙汰もなき甲斐が、人目を忍ぶ編笠の中より殊更に馬上いそぎの我を呼び止めたる心中、さてこそ不敵の逸物、時に應じ機に觸れて元來どれほどの工夫を巧むやらむ、面白しく、互に思はぬ途中の出會を萬事の用意もなくて猶更ら面白し、いざや三寸の舌鋒を交へて序幕の一勝負してくれむと、石田彌右衛門また音に聞えたる酒井家の名物男、ひらりと馬より飛び下りて會釋しながら、

「これは原田殿、おもひもよらぬ途上で御意を得申す、幸ひ互の屋敷外、すべての作法を取外して其處あたりの水茶屋で呵しう語りませうかな」

「や、そのことく、ついでに石田殿、一酌の御恩にもあづかりたい」

「はよよよこれは殆ど奇遇ぢや、かつ珍重」

伊達の名物原田甲斐と酒井の名物石田彌右衛門、一方は飛ぶ鳥落す天下大老の權威を影身に添うて操る男、一方は奥州五十四郡の支配に物足らぬ心地して今この太平を恨み顔なる男、互に表面は主と主とをいたゞいて取組めども、内實は自己が一身と一身の器量くらべ、しかも白刃を抜いて打合ひもせず眼を怒らして争ひもせず、さては窮屈なる儀式作法の中に坐しての口論にもあらず、遠乗の歸途と編笠まぶかに忍び路との出合、ところは兩國水茶屋の葭簀かけたる片蔭の床几に憩うて、笑を含み身を傾けつゝ打解けて談笑せる體、花の江戸に人しれぬ一段の花なりける、

「や、原田殿が今日の出立、たゞ草履取ばかりを召連れて臙富士の氣流し落し差、とんと見違へ申した、いづこの浪人衆かと、はよよよと偕どこへ在せられたな、寸暇もあらう筈ない御多用の御身で斯くも悠々たる忍び路は、その的を聊か御聞き申したいことぢや」

「お言葉ながら此方よりも、ちと尋ね参らす、天下支配の御家の石田殿ともあらう御人が、綿服に身を固めて八寸の逸物に白泡をかませたる體、今この太平の世に何を目的の狩鞍めいてやら、はよよよよ斯くいふ甲斐なども今日の獲物の端くれでかな、おもへば俄に首骨手足の痛む心地が」

「お言葉ぢや、お言葉ぢや、そこが全く原田殿の御言葉」

「拙者の言葉とて、別に一流あらう筈もなし、たゞ思ふ事を其まよに吐く前後見ず、かるが故に屢々おのれが手で自己が咽喉を絞める大白痴、はよよよよ」

「いや、思ふことを其まよに言はるよよりも、口を閉ぢて忽ちに事に行はるよ怖ろしの鐵壁ぬき」

「はよよよ障子一枚も破りかねて、さまざまの苦艱に逢ひ申すぢや、とかく人は我みづ

から我の力まで、叶はぬ瀬戸に目鼻の舞ひ戻る雜魚一尾とは聞き及ぶ魚河岸の惡口のみでない、こよにも一人」

「その雜魚めが鯨の眼球に喰ひ入ッて大船の檣に等しき三十七間の死骸が浮き上ッた物語、また此ごろの魚河岸にあるとやら申すことぢや」

「はて奇怪千萬、されど六尺の大男が蚊に刺されて驚く世の中で御坐れば喃」

照りもせず曇りもやらぬ春の夜の朧月夜に似たる男と男、水底に沈みし針の穴をも見通すほどの眼を持ちながら、互に何事も唯ほッとして知らず顔なる風情、怒るべき事に怒りもせず笑ふべきことに笑ひもせず、わざと我から心を聞き合つて的を外れし空矢のみ射かくれば、葭簀の外に聞き居る下郎二人が耳にも更に何の事やら、水茶屋の婆は思はず眉を擧めて狂氣武士の出合かと疑ふばかりに、いよく恍惚ぬいたる原田甲斐、ますくいたづらめいた

石田彌右衛門、されど互の胸裡には人しれぬ白刃を抜き合せたりける、

「なう甲斐殿、かくお互に主持の身、しかも其家々では共に低からぬ役義の手前も御坐れば、かう打解けて一つ鍋に等しい箸をりかどみの兄弟めいたる物語いたすは全くの御縁、まして思はぬ途中に出合うて席もあらうに、はよよよよこの葎簀の蔭の水茶屋に床几で打寛ぐとは一入の奇縁ぢや、されば奇縁ついでに丸裸となつて、此上おもしろの談合して見まいか原田殿、や、何となう、まだ言ひ足らぬ心地がするぢや」

「丸裸、それ面白い、なれど其上なほの面白味は、親より譲りの身の皮一重も剝いで、同じうは腸と腸の搗き交ぜ餅、美味からうでないか、石田殿、はよよよよ」

「なるほど、丸裸とて臟腑の見ゆる筈はなし、さらば先づ拙者より浮世の艶を取退けて申さうわ、さて甲斐殿、貴方は風聞に聞き及んだよりも一入の不敵人、拙者主人を近來の敵と

覗うて御坐らう筈、わけてこの石田奴を、入らざる無用の横鎗と」

「いや、甲斐よりは勿體なし、夢さら敵などとは思ひ参らさう次第もなし、よし萬に一つ恐れながら敵としてからが蟻螂の龍車どれほどの事なるものでがな、たゞ或人の事に就いて聊か一時の御不審を打つたは全くの事ぢや、なれど、その不審も近來は解け申して我みづから慚愧至極の折柄、まして御身が横鎗を受けう覺えもなし」

「その或人の事に就いて元來いかなる御不審を打たれしか、たとひ今は御心が解けたといはるよにせい」

「はよよよと解いたものを、また結んで語れとは異なる仰せ、なれど斯く俄の御懇意を蒙る上は、さて何をか包まむ、憚りながら奥州五十四郡を片手に引提けて片手には一門一家の宗徒を驅り盡し、あはれ今この太平の世の地軸も抜けむばかりの一活動を御目にかけてむか

と、はよよよよよよよしや現今の御威勢にても、この御慰みは容易く出来まじき一義、石田殿、なんと思はるゝな、甲斐奴は九州原田の嫡々以來、いづれも斯の如き狂氣で御坐れば、萬事お手柔かに願ひ上げまするぢや」

原田甲斐後編

たゞこれ利をのみ生命の町人には、よしや誤つて祖先傳來の角屋敷を一夜の風に吹き飛ばすとも、またの浮世の物種こゝに身こそ大切なれと尻ひツからけて遁るゝ道は種々あれど、唯これ名のみ生命の武士には何とせむ、一たび白刃を叩いて斯くと誓ひし上は、その事やぶれて遣り損うたる曉は忽ち絶體絶命、もはや何處に遁るゝ道もなく、せめて僅に腹一文字の申譯

おもへば果敢なし草の葉末に轉がり落つる季よりも、
酒井家の出頭石田彌右衛門は正しく我ために再生の恩人、しかも其後おのれを知られて三百石の捨扶持に三年を養はれたる義理は今こゝなり、もしや萬に一つ仕損じてからが何程の事からあらむ、心を安んじ給へ、原田甲斐とて身は鐵石の五體にもあらぬ尋常の人間、忽ち引寄

せ引ッ組んで刺し違へむに然までの念は入るまじと、この髻面の片頬に天晴の男笑を含んで
 覗ひ込みし昨日今日、おもひきや四十二年の此星霜を夢うつとも忘れかねたる我子の良人
 も同然、しかも世にあるかぎり生命の君として册き纏ふ情の恩人ならむとは、腕も折れたり白
 亦も鈍れり、やれ今鳴り響く淺草寺の入相鐘は、この氏家平六に寂滅爲樂を誘ふがためか、
 愛著の羈に迷うて原田を脱さば士は自己を知られたるものよために死すべき石田に何として
 男と名乗らむ、さればとて然諾を重んじて石田の誓言を果さば現在うみの我女へ淺からぬ原
 田に對うて我面いかに鬼とや見らるべき、まして十九の今日まで蟲氣も持たさで花の姿に育
 て上げたる義理の父その老人の手前もあり、あはれ平六まことに四十二の大厄年、
 さらば詮なし、たゞ一死あるのみ、彌陀佛と唱へて一室の中央に坐しながら、かねて用意の
 香を炷きつと、心もろとも磨る墨の硯ひきよせ筆の命毛かみしめて、人しれず書き遺したる三、

通は誓言を破りし謝罪狀そへて石田彌右衛門、その一通は神ならぬ身の誤ッて覗ひし委細を
 原田甲斐、残る一通は娘の露へ逢ふが別れの父子一世が涙こまぐく假名文字を連ねたる文
 體、いかに物の哀れや籠りけむ、

いざとて容を改め座を固め、一たび閉ぢし眼を開いて靜に襟かきわけつと、するりと抜き放
 ちたる小刀は志津三郎、夏なほ寒き氷の白刃、

入相つぐる淺草寺の鐘の音は、正しく我に寂滅爲樂を示すなり、流るゝ隅田の岸うつ水音は
 正しく我に人生如水の觀を示すなり、今となつて何をか歎き何をか煩はむ、やがて雲間に出
 でむ月を現世の餘波に、いざ然らば死出の旅路を急がむと、かッては鬼平六と唄はれたる不
 敵の髻男も、ものゝ義理を踏んで組み伏せむ力なく愛著の羈を斷ッて解かむよしなく、あは
 れ進退こよに谷ッては曉またで我みづから我白刃に伏すの外なし、

彌陀佛々々々、せめて六道の辻までは我を導き給へ、其後の前途は地獄極樂いづれにても構はぬ男一疋、只今それへ旅立ちまするぞと、かくても何處やらに拗ねて一節おもしろけの面魂、惜しやこれほどの奴あはれ人しれぬ涙の淵に沈み果たさで、おどろく萬人の目前に花々しき最期の死晴させてやりたし、抜き放したる志津三郎を懐紙もて巻きあげ、襟くつろけ坐を組んで心を静め、弓矢取たれも斯くこそ入相の鐘の響きに花は散るなりと、流石に平生たしなめる小諺の一節くりかへしくして三度目の聲がすかに終ると共に、一期の兩眼くわつと見開いて鋒亦に自己の鼻膏をひいたる體、物すごく描ける勇士に似たり

あはや露命の一刹那、仆るゝ機もろとも身を抛け込みしは娘の露なり、さつと父が腕に取付いて膝上に顔おし當てたるまよ、我を忘れて上げたる悲鳴は平六が腸に染み渡つて、今や斬り割かむとする白刃よりも痛かりけむ、宛ら死毒を舐めしが如き顔色目鼻を一つに寄せて苦しき聲を絞りながら、

「なとなぜ止め居ることな女中、武士が思ひ切つたる最期の席に、無禮、失體、きよ奇怪の振舞する女め、何人の娘、誰が寵として許さぬぞ、退きををれ、退け、退かずば引ッ擱んで抛け出さうや、

怒れど吐れども耳へも入れず、たゞ五體を重量かけて、武者振りついたる忍び泣き、雪より眞白の襟首に黒髪みだれかよりて戦ぐ風情を、平六じつと見詰めて兩眼の溜涙ほろくくと落しぬ、

「こりや、よう聞けよ、この平六は父でないぞ、いはゞ汝を藁の上より捨てたる鬼、また汝が生みの母を、いはゞ殺したも同然の怨敵、まして今は、あの老人の子でないか、原田甲斐とて江戸幾萬の武士中に一粒選の男を持つた手柄女、身の程わきまへて見苦しの妨害す

な、平六は死なで叶はぬ仔細あつて死を急ぐ今、はよ、はよよおぬしなンドが鏡に對うて紅白粉、誰やらむがために裝飾ると同じことぢや、よいか、合點まるツたか」
いひつゝ死際の手に泣き伏せる露が鬢のおくれ毛を撫で上げつゝ、耳に口よせて熱湯の涙をその横顔に浴せながら、

「行末かけて、夢うつゝにも甲斐殿を粗畧にすな、もし、もしや、あの御人の身に不慮の災禍あらむ時は、この、この黒髪を、此まよ置くなよ、男の追腹同然、忘るゝな、しかと覺え置け」

おもはず兩國の廣小路に行き逢うて、葭簀の蔭なる水茶屋の床几に腰うちかけつゝ、互に笑を含んで語りし言葉の末に、あの甲斐奴が憚りもなく我に對うて吐いたる不敵の一言、奥州

五十四郡を片手に引提け一門一家を驅り催して下馬先の御門前へ推參いたさむかと思ひし程の狂氣、この後とも萬事の御手加減を願ひ上げますとは、憎さも憎し彼奴の眼中すでに我我主従を恐れざるのみか、入らざる無用の腕立して後悔し給ふなといはぬばかりの面魂、さらば伊達の本家を覘ふ分家の兵部が頼みよりも、今は彼奴の面魂に對して酒井家が武門の意地づく捨て置き難し、さるにても氏家平六その後いかにしけん、何の音沙汰なきは不審の至極、敵手は甲斐なり萬一や仕損じて逆さまの穴に落ちやしつらむかと、石田彌右衛門たゞ獨り眉を擧めつゝ、奥まりたる茶室に人しれぬ思案の折も折から、その氏家平六そと訪ひ來し取次の口上、こゝへくと彌右衛門おのが小膝を打ちぬ、
氏家平六が入り來りし顔色を見るより、成敗いづれかは早くも心中それと察せし石田彌右衛門、しづかに近く招いで聲を潜めながら、

「さて大儀々々、敵手が彼奴だけに一倍の骨折であつたらうわ、委細いかに」
じろりと睨むが如く息を殺して含みし體に、平六またほつと思はず息を吐いて、進み寄りつ
つ額越に見上げながら、

「見事、遣り損ねました、なれども、死骨の平六かく生きて還りし上は、いさよかの御土産
を持參」

さもあるべし、原田甲斐なかく一朝一夕の術に乘らぬ奴、さりとして平六また敵に對ひなが
ら空手で歸るまじき奴、こは却つて其間に面白き取組の緒もあらむかと、石田なんとやら俄
に眉を開いて首肯しながら、

「まづ持參の土産物、見たいく、はて何であらうな」

「外でも御坐らぬ、かねて御所望の原田甲斐、しかと手に入りました」

「むよ、その働き首尾よう仕て退けながら、何となう憂ひを含む足下の顔色」

「この顔色なればこそ、あれほどの男を手に入れたる委細、おそれながら、御賢察いかに、

まづ試みに言ひ當てよ御覽するも亦この場の御一興」

「さて事むづかしうなつたわ、はて難題、なんと解かうか」

一朝知己の恩に感じて然諾を果さむとすれば忽ち愛著の羈を斷つて鬼となるべく、愛著の羈
を其まゝ鬼とならずんば忽ち知己の恩に反いて然諾を果さざる虚偽の奴となる、されば進退
こよに谷ツて一死の外に男を立つる寸隙もなしと、智慧も工夫も抛け捨てよ、あはや白刃に
伏せむとせし氏家平六が何とかしけむ生命を無事に訪ひ來つて、かねてより御所望の原田甲
斐うち殺して骨にするまでもなし、首尾よく手に入りしとの口上、さては如何なる俄の消息
やありけむ、

石田彌右衛門おもはず膝を進めて、四方を憚る聲を潜めながら、

「これまで日夜の工夫さまざまの術に落ちざる八面鋒の甲斐を、何として容易く引入れたぞ、君侯にも嘸や案外の御満足、第一が兵部殿の身に取って天へも上る心地であらうわ、やれ近來の大出来ぢや、手柄々々、して仔細は」

「原田甲斐みごと手に入れましたなれど、いさよか彼の注文も御坐れば」

「いはいでもの事ぢや、あれほどの男たゞ其まよの無事では参るまい、いづれ所望のあるべき筈、ところで彼奴が所望」

「は、甲斐は怖ろしの目色わざと打沈めて一夜のこと、この平六を膝近う呼び寄せながら、こりや秘し居るな酒井家の石田が手のものとは疾くより承知、また叶はずは引ッ組んで刺し違へむとの計策も承知、なれども我に對うては見戯ぢや、逆も詮なき無用の駄骨を折ら

むよりは萬事うちあけて汝が分相應の白状せい、せめて片面だけは立てよ得させむと、睨みし眼中さのみ人並に違はねど、何とやらむ鋭き光を放つが如き心地して今もなほ」

「むよして其後の段取は」

「もはや手も口も叶はぬ瀬戸と心得、拙者め胴骨抛け出して、かねて仰せの御内命かうくと打明けしところ、流石は原田甲斐、驚きもせず笑を含んで首肯のみ、やがて拙者の耳朶を貸せとて小指に引寄せ、小刀の柄に右手をかけながらの私語」

「やれ油断のならぬ奴、してその私語は」

「その私語の次第は、伊達政宗の一子として正しく伯父たる分家の兵部殿が他家よりの種を交へし甥の當主を掻き退けて本家を奪はむこと、申さば古障子の紙を破るよりも易かるべきに何事ぞ苟くも天下の大老たる權威を以て後楯とは餘りに過ぎたりく勿體なし、かく

いふ原田甲斐とても片手の業、雙手を使はむこと聊か鶏を割くに牛刀の心地とする、されば可憐ら御威勢を僅か奥州五十四郡の後楯に使ひ給はむよりは、さらに幾倍の獲物、憚りながら取らば今ぞ取るべき時節の天下取になり給ふこそ、全くの御威勢、もしこの甲斐を幇幄に召されなば神算鬼謀つぶさに申し上げむまよ、そと石田殿へ傳へよとの不敵さ」

きくや、否、流石の石田彌右衛門おもはず兩眼くわツと見張ッて暫しの無言、されど平六も今は何の憚る顔色もなく、

「もし天下取の御用に召されずば、わづか一國一城のために忠奸善惡の名を唄はれむこと惜しき甲斐、あらためて五十四郡の礎を固め、まづ眼前の兵部殿を取ッて押へし後に、酒井家の一門一類を敵に引受け、あくまで勝敗を争はむ覺悟、この段も念のため石田殿へ傳へよとの口上」

聞く度毎に石田彌右衛門おもはず顔色を變へて驚きぬ、されど驚かざる氏家平六、今は却ッて原田が腰の印籠となりぬ、

現在の伯父に當れる兵部をして甥の綱宗を掻き退け伊達の本家に立たせむことは、古障子の紙を破るよりも易き業、この甲斐にしても力あまりて物足らぬ心地とするに、あはれ何事ぞや、下馬將軍ともいはるよほどの勢威をもて斯る小事に無用の骨を折らむとは、同じ骨を折る上は更に擴めて憚りながら當代を覗ひ給へ、天下取の御用には甲斐みづから進んで犬馬の勞を辭せざるべしと、一時の難題を切抜くための方便か、多年の胸に蟠れる野心か、眞偽いまだ俄に知るを得ざれども、その大膽不敵さには酒井家の名物と唄はれたる流石の石田彌右衛門も驚いて目を圓くしぬ、

氏家平六まづ石田を驚かして、そのまゝ竊に甲斐が許へ馳せ歸れば、待ち受けし甲斐おもはず笑を含んで近く膝下に差招きつよ、

「石田奴なんとしをツた、いかに酒井の一粒選とて高が太平の行列を飾る當世男、嗚や驚きつらうわ、はよよよたしかの返事でも持ち歸ツたか」

「御意に御坐りまする、仰せの段々かくと打明けし時、俄に坐を動かし目色を變へての無言」

「夢おどろかす曉の鐘、さもあらうわ、して其後に彼が言葉は」

「なるほど原田は聞き及びしよりも一段おそろしい奴、なれども天晴の武士ぢや、そもく神君以來、磐石の千代田の城に對うては國司大名も首骨おのづから縮まる世の中に、東北の草叢に育ちし陪臣の身を以て一蹴りに蹴飛ばさむが如き大剛の腸、あはれ今までの境涯よも伊達家の八千五百石に辛抱しをツたぞ、しかも斯かる一大事の野心を、たゞ氏家平六と

名ばかり覺えし出所不明の汝に打明けて天下大老職の出頭たる我に憚りもなく傳言せよとは、さてく、胴骨の太き奴かな膽魂の張り切ツたる奴かな、かほどの横組やぶりは、もはや我等が手に及ばじ委細の趣をと言上して主侯の御指圖を仰がむのみ、もしや事によれば譬ひ兵部が一條なくとも、生けては置かれぬ不敵者、平六あらためての一活動たのむかも知れぬぞ、まづそれまでは其まゝ甲斐が藥籠中の物となつて、随分彼奴が氣に入る工夫せよと以上の通り石田殿が内命」

「はよよよよいよく面白うなツて來たわ、夜更け人定まつて後、奥まりたる館の一室に主従が額を鳩めて密議を凝らす體、や今にも目に見るやうぢやわ、そのころは恰もこの甲斐、露が膝枕に小唄うたうて、はよよよ天下の大老を三寸の舌頭に弄んで空うそぶくとは萬金に代へ難き一期の慰み、や、とかく浮世は斯うしたものか」

石臼を楊枝で刺せといふとも人皆おそれて頭を伏する權威無上の下馬將軍を、影身に添うて操るほどの酒井一流利物の石田彌右衛門さへ、さすがに世を憚り人を忍んで竊に吹ッ込みし伊達兵部が一條に、奥州の草叢より出でたる陪臣の身を持ちながら幾百層の輪をかけて鼻息に吹き飛ばしつと、天下取の御用ならば一番まかり出でて力を致さむと逆様に吹き込んだる大膽不敵に引替へ、例の駒形に身を横へたる甲斐は凡俗の浮世男、あれほどの膽魂どこにあるかと疑ふばかりの顔色きよろりとして、

「こりや露、けふの晝餐には何の馳走ぞ、今から聞き置いて腹の蟲に安堵させてやりたいわ、はよよよよ一酌も添へて喃」

うみの父の平六が思ひ切つたる最期の白刃を愛著の羈に搦みつけて、これなう同じ死する身

ならば我身の生命あづけし君のためにと、血の涙もろとも掻き口説きし其後の御用、あはれ首尾よう遂げしやら果さぬやら、この四五日は汐留の屋敷とばかり絶えて顔見ねば、心にかよる事、山々ざりとて打つけに聞きもならぬ苦しさを、甲斐それと察して笑を含みつと、

「露、あの氏家平六といふもの、きけば汝と何かの因縁あるよし、過ぎ去つた事は儲おいて、や、天晴よい男に縁を持つたの、たしかに當世めづらしの意氣地者ぢや、過日も、そと内用を申し付けたところ、おもひのまよに首尾よう遣りをつたわ、兩三日も経たば、また此家へ呼び戻して置かう、あ汝といひ彼といひ、めぐりめぐりて同じ我手に附かうとは、世の中とんと不思議ぢや」

何事も我名の露に等しく、いはど草の葉末に宿る女の身、甲斐が言葉の端々に、はや仔細もなう打解けて笑を浮べつと、

「御用さへあれば、此家へ呼ばずともの人、行末なほも頼み上げまする、もしや此後あの人に、御心そまぬ事もあれば、この身を如何やうにも」

「はよよよよ人質にせよとか、不吉々々、其方を人質に取らうより、あの髻男を人質に取つて、原田が愛珠の逃げ出さぬ用心か肝要ぢや、俵いつまでも通けて呉れるなよ、もし武家風が嫌ならば、八千五百石ころりと抛け捨てよ人知れぬ山蔭で勤蹠もつて暮さうわ、はよよよはよ、や何として其やうに怨み顔なる、こりや手をついて謝罪せうか、や、詫びても許さぬとか、さて難題々々、はよよよよよ」

たはいなく見戯にも似たるこの甲斐が、さつと首を回したる曉の面魂いかに、やがて今にぞ現はれやせむ、

伊達陸奥守綱宗家来原田甲斐に御用の筋あり其まよ早速罷り越すべきよし、大老酒井雅樂頭より汐留屋敷へ使者として來りぬ、

甲斐かくと聞くより獨り心に首肯いて、飛ぶ鳥おとす下馬將軍より改まりし使者の口上そもや何事ぞと、眉を擧めて頻りに訝る諸士を慰めながら、不肖なれど拙者まかり出づる上は闇魔の廳なりとも仔細なき覺悟、ましてや人間の酒井殿が手前どれほどの事あるべき、吉事なれば格別、もし凶事なりとも君侯始め方々には弓矢八幡御迷惑かけまじ、心配御無用々々々、浴みして身を清め髪を櫛り、麻の上下に五所紋の黒小袖、大小印籠いづれも今日を晴として、白足袋に奉書糾緒の重草履、懷紙幾帖の重みに襟を整へて、毛脛の兩若黨を左右に従へ、つくり髻かけたる伊達奴に替草履を取らせて悠然と立出でたる甲斐が男振、顔色は淺黒し鼻は高く一文字の口をめぐりて青黛を塗れるが如き剃刀の痕、

大手下馬先の酒井家が屋敷に差かよりて、門番の足輕づれにも目禮を呉れつゝ、徒士の輩にも會釋を施しながら、萬事つゝしみ深く小心細志の慇懃に身を固めたる振舞、誰か天下取の御用ならばと片頬の笑を含んで吐いたる不敵者と知るべき、内玄關の取次衆へ聲しづかに申し入れぬ、先刻お召に依つて伊達陸奥守家來原田甲斐參上、

かねて館の出頭石田彌右衛門より委細を含んで待かけし者ども、殊更に禮を正して陪臣の甲斐とはせず、宛ら利物の直參衆を扱ふが如く待遇して、しかも大玄關に通じたる小書院の客室に招じ入れつゝ、天目の上茶、立臺の盛菓子、やがて重役の一人しづかに罷り出でよ、

「これはく御苦勞千萬、只今主人義、生憎手許の用辨にかより居りますれば、御大儀ながら暫時これにて、いや段々と聞き及ぶ御大家の御支配、嗚や御勤勞の事と」
いひつゝ慇懃に挨拶すれば、甲斐おもはず心のうちに冷笑うて、頭を上げて息吹く事を知ら

ぬ當世流の蛆蟲が、石田奴の指頭に動かされて何をか吐し何をか諷ふぞや、ふよと鼻頭に出づる笑聲を呑み込んで兩手を仕へながら、

「陪臣の拙者かく御丁寧の式にあづかり何とも以て恐縮の至極、館様御用の相濟みますまでは更に御構ひなく、此まよ〜」

原田甲斐たゞ獨り默然として、酒井家の客室に待つこと二刻あまり、晝頃になれば山海の珍味を盡して慇懃に待遇され、つゞいて食後の茶菓を進めらるゝ時、重役まかり出でて、主人こと生憎手許の用辨に差かよりて猶いまだ其まよなれば、御大儀ながら今しばらく此席にと、人は變れど同じ事のみ兩三度、やがて夕暮近くなりし頃は、またもや美味を盛り上げたる配膳の用意、いつしか其日の燈火を見るに至りぬ、

さてこそ案に違はぬ石田奴が分相應の策略、主の雅樂頭が權威無上の大老職を楯に取つて其

陰に潜みながら、この甲斐に飽まで顔色を變へさせ腸を煮させての後、おのづから張り切る心も弛み固めし身も勞れたる一刹那を、得たりや應と俄に呼び寄せて萬燈かどやく大席の中央に置き据ゑつゝ、たくみに詭辯を弄して不意の横打をかけむとの心中、あはれ呵しや、當世なみくの奴ならば其手敷をせずとも下馬將軍といふ四字に眼眩んで度や失はむ、されどここに誰と見える、およそ原田甲斐ほどの男を取挫がむには聊か手緩しく、いざや今夜もまた逆様に吊しあけて生涯わすれぬ急所の痛さを知らせたる上、呆氣に取らるゝ主従が驚愕顔しづかに見物してくれむものと、衣紋を整へ扇子を膝上に動かさること木偶に等し、やがて其日も暮れ果てゝ、やうく小姓めいたるもの出で來りぬ、

「伊達陸奥守様御家來、御案内申し上げます」

御苦勞千萬と應へて甲斐そのまゝ立上りつゝ、ひかれて長廊下を傳へば、杉戸口より坊主う

けとりての導きに、なほ奥ふかく進み入りし時、一室の外に待ち受けたるは石田彌右衛門、慇懃に迎へて手を取らむばかりの挨拶、

「や、これはく、差當つて手放しかねたる用事に追はれ、心ならずも、一日を其まゝに打過ぎたる如き不始末、何とも氣の毒の至極と、まづ主命かく御坐りまする、あはせて今夜は萬事うちとけて我か汝かの物語を所望の段も、前以て申し入れ置きまする、下つて彌右衛門義も席に罷り出でまする間、平に御容赦なく、思ふがまゝの御心次第に原田殿、さて日外の兩國水茶屋で葎簀の蔭の腰掛談話、はよよとよとよ」

「いや、あの時は別して失禮の事のみ申し上げ、今更ら慚愧後悔、いざ餘談は措いて御前への御案内たのみ入りまする」

兩雄まづ門口に意氣を試み合ひぬ、

たとひ八千五百石取の名物男とて天下の大老が館へ拜趨の陪臣、いはど家僕同様に扱はるべき筈ながら、當時利物の直參衆を待つが如き慇懃、なれども其日一日を空しく客間に捨て置かれて、奥殿ふかく導かれたる原田甲斐、額を上げて見渡せば正面に館の主人雅樂頭、茶坊主と小姓の外には出頭の石田彌右衛門、萬事を心易けに粧へども今夜ぞ伊達家に取つて浮沈の一大事、甲斐が身も殆ど生死の境なりける、

「や甲斐、いつ見ても天晴れ男、さて今日は思はぬ用辨に驅られて、つい一日を徒らに潰させたこと赦してくりやれ、何とも氣の毒千萬」

「まづ何よりも益々御健勝の段、天下の御ため謹んで祝賀を申し上げます、ついでには今朝より重ね々過分の御待遇を蒙り、陪臣の甲斐め、一入さらに恐れ入りまする」

「時に甲斐、あらためて呼び寄せたは内々で談合いたしたい筋があつてぢや、石田ともかくも

汝から言ひ入れて見よ」

石田彌右衛門はツと答へつゝ、いさゝか座を進み出でて甲斐に對ひぬ、

「原田殿、只今彌右衛門より申し入るゝ事、當家主人の言葉同様に思はれて、しかと後戻りの致されぬ御返事を願ひたい」

甲斐も容を改めつゝ石田の方に對うて膝を進めぬ、

「仰せの段々、しかと承知いたしまする」

互に誓ひし言葉と言葉に、雅樂頭おもはず笑を含んで、脇息にかけたる手を外しつゝ片唾を呑みぬ、

「原田殿、今更ら何をか曲り申さう、萬事うちあけて眞一文字に頼み參らす義は、分家の兵部殿を、あのまゝ伊達家の主人に立直して下さるまいか、たゞ足下が一活動で」